

熊山田散布地ほか

土地改良総合整備事業に
伴う確認調査

1988年3月

岡山県教育委員会

序

本報告書には、邑久郡邑久町尾張、山手、豊原、下山田に所在する熊山田散布地、
真徳貝塚、真徳貝塚A、真徳貝塚B、くら はな 蔵が端貝塚、円張東貝塚、えんぱりひがし 円張東貝塚、ふなばらかじ はな 船原棍ヶ端貝塚、
鳥博遺跡の確認調査結果を収載しました。

この確認調査は、県営土地改良総合整備事業の実施に先だって埋蔵文化財の保護、
保存の資料を得て、土地改良総合整備事業との調整を図るため、昭和62年度国庫補
助事業として行なわれたものであります。

調査の結果、熊山田散布地では弥生時代の溝・土壙を、真徳貝塚Bでは縄文時代
後期以前と考えられる貝塚を、また円張東貝塚・船原棍ヶ端貝塚・鳥博遺跡では遺
構は確認できませんでしたが、先土器時代のナイフ形石器をはじめ縄文時代から中
世に至る多量の土器や石器を含む包含層を確認することができました。

これらの成果を収めた本報告書が、文化財の保護、保存のために活用され、また、
地域の歴史を研究する資料として役立てていただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委
員をはじめ、邑久町役場、邑久町教育委員会ならびに土地所有者等関係各位から賜
りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

岡山県教育委員会

教育長 宮地暢夫

例　　言

1. 本書は、岡山県教育委員会が、邑久郡邑久町における県営土地改良総合整備事業に伴い、昭和62年度国庫補助を受けて実施した「熊山田散布地ほか」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、邑久郡邑久町尾張ほかに所在する。
3. 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター職員平井泰男が担当し、専門委員の指導、助言のもとに、昭和62年11月25日から昭和63年1月27日まで実施した。
4. 発掘調査にあたっては、邑久町役場、邑久町教育委員会、地権者等関係各位から多大な援助を受けた。
5. 本書の作成は平井が行った。
6. 本書に使用したレベルの数値は海拔高である。方位は、第1・2・3・5・10・17・20・25・26図が真北、他は磁北である。
7. 本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25000分の1地形図(備前瀬戸、西大寺)を複製したものである。
8. 出土遺物、実測図、写真等は岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)において保管している。

本文目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査の経緯	7
第3章 発掘調査の概要	9
第1節 熊山田散布地	9
第2節 真徳貝塚	15
第3節 真徳貝塚A	15
第4節 真徳貝塚B	22
第5節 蔵が端貝塚	24
第6節 円張東貝塚	25
第7節 船原棍ヶ端貝塚	28
第8節 鳥博遺跡	29
第4章 まとめ	44

挿図目次

第1図 遺跡位置図（黒丸印）	1
第2図 周辺遺跡分布図（1/25000）	2
第3図 円張東貝塚貝層（C）と表採地点（A、B）位置図および表採遺物、A地点（4）、B地点（1～3）、円張の丘陵上（5・6）、船原棍ヶ端の丘陵上（7）（1/1500, 1/4, 1/2）	6
第4図 円張東貝塚貝層（1/80）	6
第5図 熊山田散布地トレンチ位置図（1/5000）	10
第6図 熊山田散布地T—1・2平・断面図（1/80）	11
第7図 熊山田散布地T—3・4・5平・断面図（1/80）	12
第8図 熊山田散布地T—6・7・8平・断面図（1/80）	13
第9図 熊山田散布地T—9・10平・断面図（1/80）	14
第10図 真徳貝塚、真徳貝塚A、真徳貝塚Bトレンチ位置図（1/5000）	16
第11図 真徳貝塚T—11・12・13平・断面図（1/80）	17
第12図 真徳貝塚T—14・15・16平・断面図（1/80）	18
第13図 真徳貝塚・真徳貝塚B T—17・18・19平・断面図（1/80）	19
第14図 真徳貝塚B T—20・21・22平・断面図（1/80）	20
第15図 真徳貝塚A T—23・24・25平・断面図	21
第16図 真徳貝塚A T—26平・断面図（1/80）	22
第17図 蔵が端貝塚、円張東貝塚トレンチ位置図（1/5000）	24
第18図 蔵が端貝塚・円張東貝塚T—27・28・29平・断面図（1/80）	26
第19図 円張東貝塚T—30・31・32平・断面図（1/80）	27
第20図 船原棍ヶ端貝塚、鳥博遺跡トレンチ位置図（1/5000）	28
第21図 船原棍ヶ端貝塚T—33・34・35平・断面図（1/80）	31
第22図 船原棍ヶ端貝塚T—36・37・38平・断面図（1/80）	31
第23図 鳥博遺跡T—39・40・41平・断面図（1/80）	32
第24図 鳥博遺跡T—42・43平・断面図（1/80）	33
第25図 トレンチ出土遺物（1/4）	34
第26図 トレンチ出土遺物（1/4）	35
第27図 トレンチ出土遺物（1/4）	36
第28図 トレンチ出土遺物（1/4）	37
第29図 トレンチ出土遺物（1/4, 1/3）	38
第30図 トレンチ出土遺物（1/3, 1/2）	39
第31図 真徳貝塚B貝塚範囲想定図（1/3000）	46
第32図 円張東貝塚、船原棍ヶ端貝塚、鳥博遺跡遺跡範囲想定図（1/7500）	46

図版目次

- 図版 1—1. 熊山田散布地 T—1, 2 周辺近景(南から)
 2. 真徳貝塚遠景(南から)
- 図版 2—1. 真徳貝塚 A, B 遠景(西から)
 2. 蔵が端貝塚遠景(北東から)
- 図版 3—1. 円張東貝塚遠景(北西から)
 2. 船原梶ヶ端貝塚遠景(北から)
- 図版 4—1. 鳥博遺跡遠景(北西から)
 2. 真徳貝塚 B T—18周辺近景(南西から)
- 図版 5—1. 円張東貝塚、貝層露出部分近景(南西から)
 2. 円張東貝塚、貝層露出部分(北西から)
- 図版 6—1. 熊山田散布地 T—1 土壌(北西から)
 2. 熊山田散布地 T—1 溝(南から)
- 図版 7—1. 真徳貝塚 B T—18発掘風景(南東から)
 2. 真徳貝塚 B T—18貝層(南西から)
- 図版 8—1. 円張東貝塚 T—30(西から)
 2. 円張東貝塚 T—31(北から)
- 図版 9—1. 鳥博遺跡 T—39(南東から)
 2. 鳥博遺跡 T—39発掘風景(北西から)
- 図版 10—1. 熊山田散布地 T—1 北壁(南から)
 2. 熊山田散布地 T—1 南壁(北から)
 3. 熊山田散布地 T—1 東壁(西から)
 4. 熊山田散布地 T—2(南西から)
 5. 熊山田散布地 T—2 東壁(西から)
 6. 熊山田散布地 T—3(北東から)
 7. 熊山田散布地 T—4(南東から)
 8. 熊山田散布地 T—5(北東から)
- 図版 11—1. 熊山田散布地 T—6(北東から)
 2. 熊山田散布地 T—7(北東から)
 3. 熊山田散布地 T—8(南東から)
 4. 熊山田散布地 T—9(南東から)
 5. 熊山田散布地 T—10(北東から)
 6. 真徳貝塚 T—11(南東から)
7. 真徳貝塚 T—12(南東から)
 8. 真徳貝塚 T—13(南東から)
- 図版 12—1. 真徳貝塚 T—14(南東から)
 2. 真徳貝塚 T—15(東から)
 3. 真徳貝塚 T—16(北西から)
 4. 真徳貝塚 T—17(北西から)
 5. 真徳貝塚 B T—18(南から)
 6. 真徳貝塚 B T—19(北から)
 7. 真徳貝塚 B T—20(東から)
 8. 真徳貝塚 B T—21(西から)
- 図版 13—1. 真徳貝塚 B T—22(東から)
 2. 真徳貝塚 A T—23(北から)
 3. 真徳貝塚 A T—24(北から)
 4. 真徳貝塚 A T—25(東から)
 5. 真徳貝塚 A T—26(北東から)
 6. 蔵が端貝塚 T—27(北西から)
 7. 蔵が端貝塚 T—28(北から)
 8. 円張東貝塚 T—29(北から)
- 図版 14—1. 円張東貝塚 T—32(西から)
 2. 船原梶ヶ端貝塚 T—33(東から)
 3. 船原梶ヶ端貝塚 T—34(南西から)
 4. 船原梶ヶ端貝塚 T—35(西から)
 5. 船原梶ヶ端貝塚 T—36(西から)
 6. 船原梶ヶ端貝塚 T—37(北東から)
 7. 船原梶ヶ端貝塚 T—38(西から)
 8. 鳥博遺跡 T—40(北西から)
- 図版 15—1. 鳥博遺跡 T—41(北東から)
 2. 鳥博遺跡 T—42(北西から)
 3. 鳥博遺跡 T—43(北西から)
 4. 鳥博遺跡 T—39埋めもどし風景
 5. 真徳貝塚 B T—18貝層出土の貝
- 図版 16—1. 円張東貝塚 T—30出土土器
 2. 円張東貝塚 T—30出土土器
- 図版 17—1. 鳥博遺跡 T—39出土土器
 2. 鳥博遺跡 T—39出土土器
- 図版 18 トレンチ出土遺物
- 図版 19—1. 鳥博遺跡 T—39出土土器
 2. 真徳貝塚 B T—18貝層出土の貝
- 図版 20 トレンチ出土遺物

表 目 次

表 1 トレンチ調査概要一覧表.....	40
表 2 遺物観察表.....	41

第1章 地理的・歴史的環境

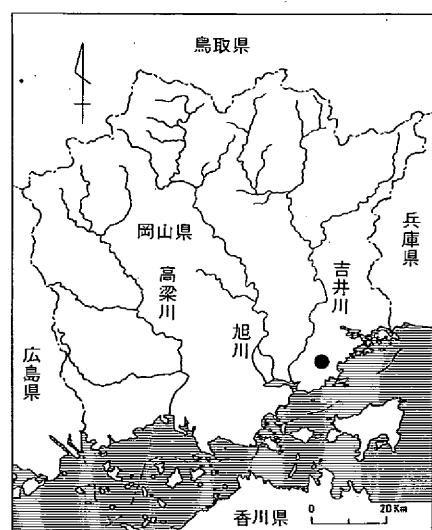
今回発掘調査を実施した「熊山田散布地」ほか8遺跡は、邑久郡邑久町に所在する。

邑久町は岡山県の南東部、岡山県下三大河川の1つである吉井川東岸下流域に位置する。

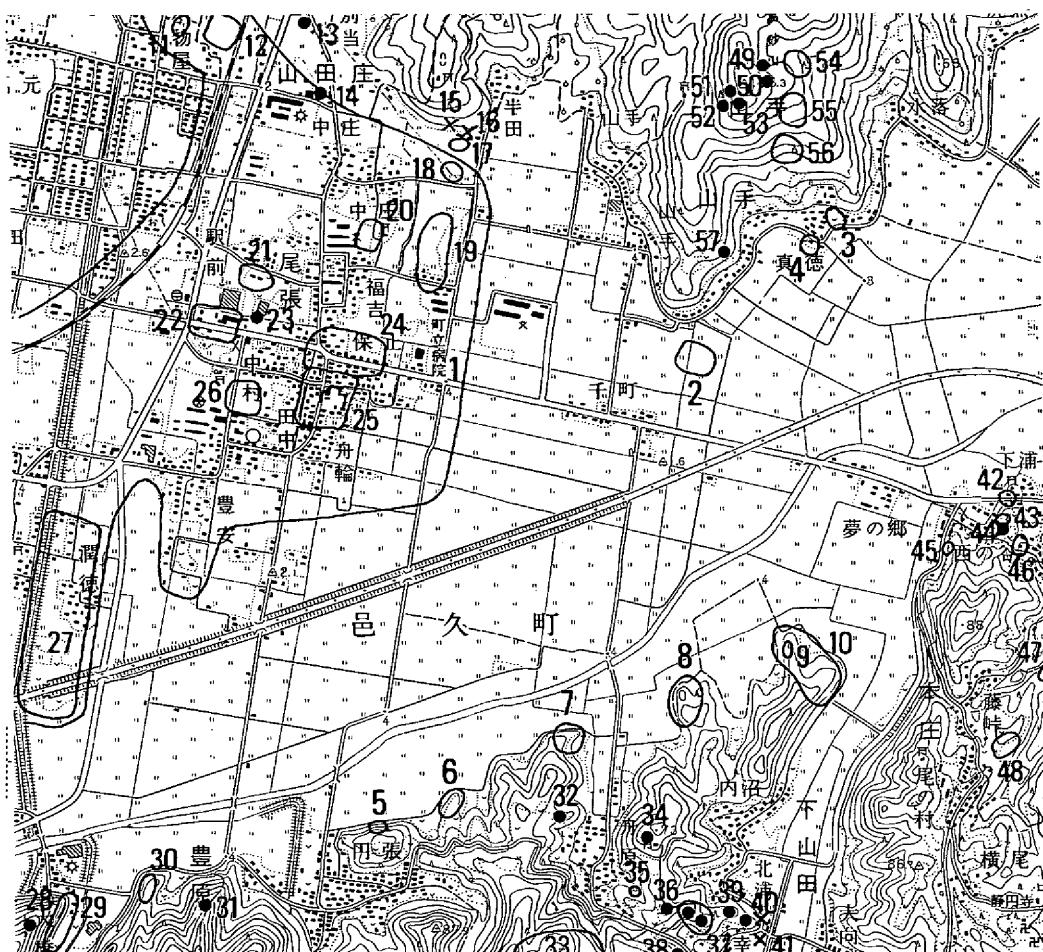
東西に細長い邑久町の地形は、その東部と西部で様相を異にしている。東部は丘陵地が多く、北には備前市、長船町との境をなす200m級の山々が連なり、南には100m前後のいくつかの山が瀬戸内海に面している。平野はこれらの山々の間を流れる小河川の周辺に形成されているが、いずれも小規模なものである。

一方、調査対象遺跡の所在する町の西部は、その北と南に100~200mの丘陵が広がるもの、大部分はいわゆる千町平野とよばれる標高1~2mの低平な沖積平野が広がっている。この千町平野が縄文時代においては瀬戸内海に続く海であったことは、縄文時代の貝塚である大橋貝塚（邑久町豊原）や宮下貝塚（邑久町山田庄）の存在などによって広く知られているところである。そしてこうした海の景観が変貌するのは縄文時代晩期から弥生時代初めの頃と考えられる。この時期になると瀬戸内海の海平面の低下とともに、吉井川によって運ばれる土砂の堆積による沖積作用が進行し、現在の山田庄、尾張から大窪にかけて幅500m前後の自然堤防が弧状に形成されていたことが、現地形および門田貝塚などの弥生時代の遺跡の存在から知ることができる。一方、この自然堤防の東部分には後背湿地が形成され、一部水田などに利用されたものと考えられるが、この地域は北と東・南を丘陵によってほぼさえぎられているためながら低湿地として存続していたものと思われる。こうした低湿地の状況が千町平野の東半部においては中世前半頃まで続いていたであろうことは、今回および1978年度の確認調査の結果（中世土器を含む黒色粘土層の存在）から知ることができる（註1）。

さて千町平野周辺においては今日まで多くの遺跡の存在が知られている。今回船原梶ヶ端貝塚T-35から出土したナイフ形石器（第30図184）は、遺跡の南に位置する標高50m程の低丘陵上から流れ込んだものと考えられるが、邑久町内においては才の峰遺跡出土のナイフ形石器（註2）とともに最も古い遺物である。ナイフ形石器などの先土器時代の石器については、近年邑久町周辺の内陸



第1図 遺跡位置図(黒丸印)



- | | | |
|------------|-----------|---------------|
| 1. 熊山田散布地 | 18. 半田前遺跡 | 35. 宮ノ前貝塚 |
| 2. 真徳貝塚 | 19. 拝登遺跡 | 36. 幸田木古墳 |
| 3. 真徳貝塚 A | 20. 品治遺跡 | 37. 幸田木古墳 2号 |
| 4. 真徳貝塚 B | 21. 門田貝塚 | 38. 古墳(全壙) |
| 5. 蔵が端貝塚 | 22. 堂免貝塚 | 39. 幸田古墳 1号 |
| 6. 円張東貝塚 | 23. 歳森遺跡 | 40. 古墳(消滅) |
| 7. 船原棍ヶ端貝塚 | 24. 水南遺跡 | 41. 幸田木散布地 |
| 8. 鳥博遺跡 | 25. 尾張城址 | 42. 佐井田東貝塚 |
| 9. 扇ヶ端貝塚 | 26. 助三烟遺跡 | 43. 佐井田貝塚 |
| 10. 扇の端散布地 | 27. 潤徳遺跡 | 44. 国司山古墳 |
| 11. サアナ寺址 | 28. 古墳 | 45. 佐井田西貝塚 |
| 12. サアナ貝塚 | 29. 大橋貝塚 | 46. 国司散布地 |
| 13. 月の木遺跡 | 30. 大橋谷古墳 | 47. 本庄 C 遺跡 |
| 14. 烟中遺跡 | 31. 猫の端古墳 | 48. 本庄 B 遺跡 |
| 15. 宮下貝塚 | 32. 舟原古墳 | 49~55. 高砂山古墳群 |
| 16. 半田貝塚 | 33. 井戸元遺跡 | 56. 散布地(弥生) |
| 17. 半田散布地 | 34. 古墳 | 57. 真徳古墳 |

第2図 周辺遺跡分布図(1/25000)

部においても、広高山遺跡（長船町）（註3）、西谷遺跡（長船町）（註4）、亀井戸廃寺（備前市）（註5）、佐山遺跡（備前市）（註2）などの遺跡において知られるようになり、低地性の遺跡の存在も指摘されている（註6）。

縄文時代になると、千町平野に張り出す丘陵裾部に大橋貝塚（邑久町豊原）、宮下貝塚（邑久町山田庄）、山手貝塚（邑久町山手）、岩神貝塚（岡山市長沼）が形成されている。大橋貝塚（註7）は前期から中期、後期にわたる貝塚（一部早期の土器も採集されているという）で人骨や獸骨も発見されており、当地域における中核的な集落と考えられている。1950年に発掘を行った木村幹夫氏の報文によると、上層ではシジミが、中層ではオキシシジミが、下層ではハイガイが多く、カキが中層以下に多くみられるという（註8）。宮下貝塚は千町平野をはさんで大橋貝塚と対照的な位置に所在する前期および中期の短期間に存在した貝塚で、シジミ、ハイガイ、カキが最も多いという（註9）。山手貝塚は宮下貝塚の東の丘陵裾部に所在する中期末から後期初頭の短期間の貝塚で、シジミを主とし、ハイガイ、カキが認められるという（註10）。岩神貝塚は大橋貝塚の西の丘陵裾部に存在し、縄文～弥生の土器が採集され、ハイガイ、シジミなどが認められるという（註11）。こうした周知の貝塚に加え、今回真徳貝塚BのT-18において確認された縄文時代後期以前と考えられる貝層など縄文時代の研究において当該地域のはたす役割は大きいといえよう。

弥生時代になると、今回の調査においても円張東貝塚や船原梶ヶ端貝塚、鳥博遺跡で前期、中期の土器や石器が多く出土し、また熊山田散布地では溝・土壙などの遺構も検出されたが、千町平野西半部には先述した自然堤防（微高地）上に数多くの遺跡が知られている。特にこの地域は弥生時代前期の遺跡が多く知られ、吉井川東岸下流域における初期農耕社会の様相を知るうえで注目される地域である。それらのうち門田貝塚は前期の貝塚を伴う遺跡として著名であり、数回の発掘調査の結果、溝・土壙などの遺構とともに土器・石器・骨角器・貝などの豊富な遺物が出土している（註12）。特に多量に出土する土器は、瀬戸内海沿岸地方における前期後半の指標とされ「門田式」とよばれている。このほか、近年では周辺部においても工事に伴う発掘調査が実施され、畠中遺跡（註13）、熊山田遺跡（註14）、月の木遺跡（註15）、堂免貝塚（註16）などにおいて前期の遺構、遺物が検出され、当地域においては前期の段階にすでに広範囲に集落が形成されていたことが明らかにされつつある。

さらに 弥生時代前期以降中世にわたっても当地域が生活の拠点として利用され続けていたことが、先述の発掘調査によって徐々に明らかにされている。特に、門田貝塚で検出された奈良～平安時代の建物跡は官衙的建物の可能性が高く、尾張郷が古代邑久郡の中心地であったことを伺わせ（註17）、また、助三畠遺跡（註18）や堂免貝塚で、検出された中世の建物や井戸・溝および青磁・白磁・瓦器などの豊富な遺物は瀬戸内海の海運や山陽道を通しての交易の実態

を知るうえで注目される。

古墳については、今回真徳貝塚AのT-23および真徳貝塚BのT-18で埴輪片が出土しているが、これは真徳貝塚A・Bの北の丘陵に所在する高砂山古墳群と関連するものと考えられる。高砂山古墳群については発掘調査などは行なわれておらず詳細は不明であるが、組み合わせ石棺を埋葬施設とするものが多く、他に小型の竪穴式石室や横穴式石室をもつ小円墳を中心には200~300基の古墳が存在しているといわれ、古墳時代前半期の群集墳として注目されている(註19)。

ところで、『岡山県遺跡地図』によると邑久町内には32ヶ所の貝塚が記載されている(註20)。これらのうち発掘調査などで時期などが明確になっているのは、大橋貝塚や門田貝塚など数例あるのみで、多くは不明である。第4図に示した円張東貝塚の貝層は、今回の発掘調査中に地元の人の教示によって確認したものである。教示によると、今から30~40年程以前に周辺の道路整備のため当該地の土取りを行った際に貝が多く出土したとのことで、現状では丘陵裾部の現畠地との段の部分に幅約5m、厚さ10~40cmの貝層が確認できる。貝層は均一ではなく、多く集中する部分と薄い部分とが認められる(図版5-2)。貝層はほぼヤマトシジミのみで構成されている。貝層中からは弥生時代前期と思われる土器が3片採集できたが、これらが貝層の時期を示すかどうかは明確ではない。また、第3図1~6は、この貝層の確認された丘陵上および丘陵裾部の崩面で採集したもので、円張東貝塚の所在する丘陵上に弥生時代から中世に至る集落跡が存在している可能性が高い。第3図7は、船原梶ヶ端貝塚の所在する丘陵上において採集した須恵器で、他にも弥生土器や土師器の小片が認められた。今回のトレンチ調査において出土した多くの遺物とあわせ、当該丘陵上には先土器から中世に至る集落跡が存在しているものと考えられる(註21)。

註

(註1)「土佐貝塚ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告64』 岡山県教育委員会 1987年

(註2)『瀬戸内海地域先土器時代遺跡地名表』 瀬戸内海歴史民俗資料館 1975年

(註3) (a)安川豊史「広高山遺跡採集の石器」「西谷遺跡」 岡山県長船町教育委員会 1985年

(b)安川豊史「先土器時代」『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987年

(註4)『西谷遺跡』 岡山県長船町教育委員会 1985年

(註5)『亀井戸廃寺確認調査報告』 備前市教育委員会 1984年

(註6)前掲(註3)の(b)

(註7) (a)『大橋貝塚発掘調査報告書』 邑久町教育委員会 1979年

(b)木村幹夫「岡山県邑久郡大橋貝塚」『日本考古学年報3』 日本考古学協会 1955年

(c)木村幹夫「岡山県邑久郡豊原貝塚について」『吉備考古』第90号 吉備考古学会 1955

年

(註8) 前掲(註7)の(c)

(註9) (a)長瀬蕉「邑久郡地方発見品ノ報告」『吉備考古』第29号 吉備考古会 1936年

(b)鎌木義昌「吉備地方に於ける早、前期縄文式土器の変遷について」『土』18号 金光図書館 1951年

(註10) 時実黙水「邑久郡貝塚分布図小解」『吉備考古』第36号 吉備考古会 1938年

(註11)『岡山市埋蔵文化財分布地図』 岡山市教育委員会 1983年

(註12) (a)鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』第84号 吉備考古学会 1952年

年

(b)『門田貝塚』 岡山県教育委員会 1983年

(註13)「畠中遺跡確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告12』 岡山県教育委員会 1982年

(註14)「熊山田遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告14』 岡山県教育委員会 1984年

(註15) 1983年に邑久町教育委員会を中心に発掘調査。報告書未刊。

(註16) 1986年に「邑久町役場庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財調査委員会」が発掘調査。報告書未刊。

(註17) 前掲(註12)の(b)

(註18) (a)「尾張助三畠遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告12』 岡山県教育委員会 1982年

(b)馬場昌一「岡山県助三畠遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究No.4』 日本貿易陶磁研究会 1984年

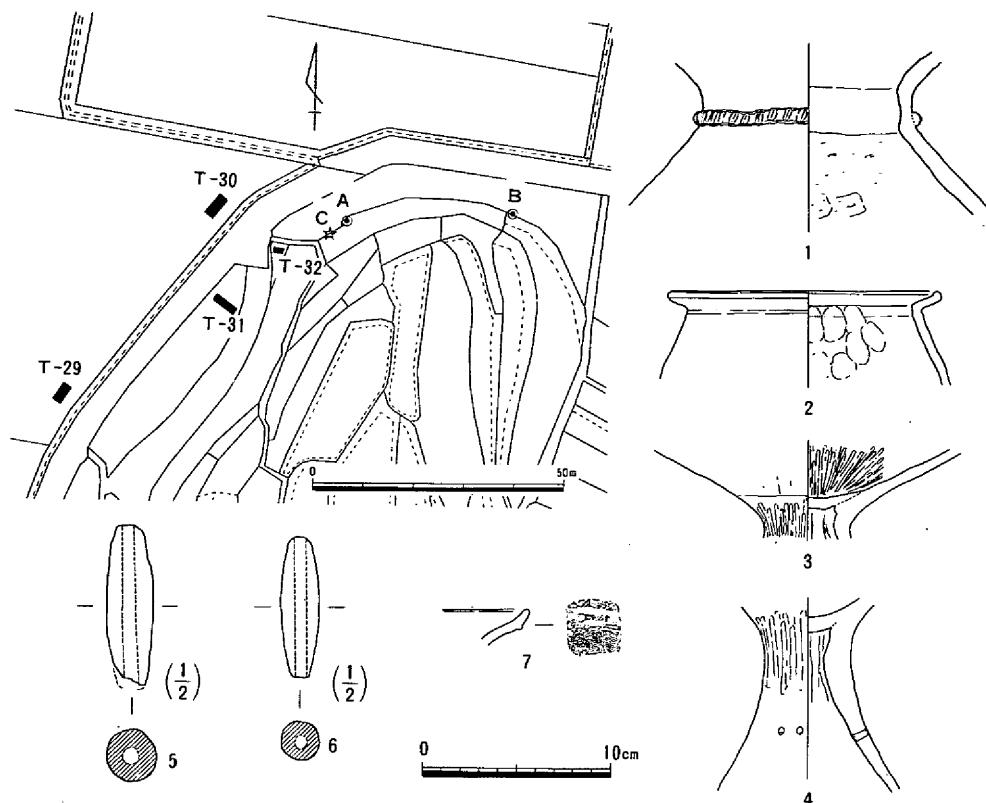
(註19) (a)『改訂邑久郡史上巻』 邑久郡史刊行会 1953年

(b)今井堯、近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本』第4巻 角川書店 1970年

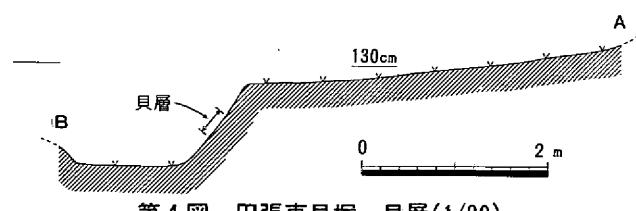
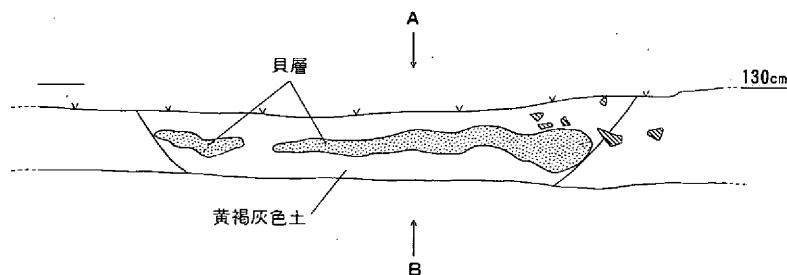
(b)西川宏『吉備の国』 学生社 1975年

(註20)『岡山県遺跡地図』第2分冊 岡山県教育委員会 1974年

(註21) 今回確認調査を実施した遺跡の遺跡名は『岡山県遺跡地図』(註20)に準拠している。なお、『岡山県遺跡地図1965年度』(岡山県教育委員会 1966年)および『全国遺跡地図(岡山県)』(文化財保護委員会 1967年)においては、真徳貝塚Aが真徳北貝塚、真徳貝塚Bが真徳南貝塚、蔵が端貝塚が祇園山貝塚、船原梶ヶ端貝塚が西山端貝塚とそれぞれ記載されている。



第3図 円張東貝塚 貝層(C)と表採地点(A, B)位置図および表採遺物
A地点(4)、B地点(1~3)、円張の丘陵上(5、6)、船原棍ヶ端の丘陵上(7) (1/1500, 1/4, 1/2)



第4図 円張東貝塚 貝層(1/80)

第2章 調査の経緯

邑久郡邑久町尾張、山手、豊原、下山田周辺において県営土地改良総合整備事業が計画されているのに伴い、昭和61年10月1日付で岡山地方振興局長より文化財保護法第57条の3にもとづく協議文書が岡山県教育委員会に提出された。内容は、土地改良総合整備事業予定地内において周知されている熊山田散布地ほかの遺跡の取扱いについてである。関係機関による協議の結果、これらの遺跡については、(1)工事着手前に確認調査を実施する、(2)調査の結果、重要な遺構等が発見された場合はその保存等について別途協議することになった。この協議結果にもとづき岡山県教育委員会は、工事施行前に遺跡の規模、状況等を明らかにし、遺跡の保護、保存を講ずるための基礎資料を得るために、昭和62年度国庫補助を受けて確認調査を実施することになった。確認調査の対象となった遺跡は、熊山田散布地、真徳貝塚、真徳貝塚A、真徳貝塚B、蔵が端貝塚、円張東貝塚、船原梶ヶ端貝塚、鳥博遺跡の8遺跡である。

調査は、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。発掘調査期間は、昭和62年11月25日から昭和63年1月27日までである。

調査にあたっては専門委員の指導・助言を得た。また、邑久町役場、邑久町教育委員会をはじめ地権者等関係各位からは多大な御協力を得た。さらに発掘作業に従事していただいた地元有志の方々にも協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

調査体制

専門委員

鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

岡山県古代吉備文化財センター

所長 橋本泰夫

総務課長 佐々木清

調査課長 河本 清

文化財保護主事 平井泰男（調査担当）

発掘作業員

阿部照子、阿部貞子、有森万久、今田和男、今田喜美枝、今田美代子、岩谷幸男、梶原小枝子、梶原達夫、梶原富美子、嘉数章、嘉数誠吉、嘉数英子、嘉数八重子、嘉数四方子、京尾真喜男、谷川亀鶴、馬場洋。

第2章 調査の経緯

報告書作成協力者

有森万久、田中淑子、埴岡美矢、馬場洋、藤原千鶴、安井ともえ。

日誌抄

昭和62年

- 11月25日 (水) 発掘器材搬入。
真徳貝塚、T-11・13・14・15掘り下げ。
26日 (木) 真徳貝塚、T-11・12・13・14・15・16・17掘り下げ。
T-11・14・15写真撮影。T-11実測。
鳥博遺跡 T-43掘り下げ。
27日 (金) 真徳貝塚 T-14・15実測。鳥博遺跡 T-43掘り下げ。
熊山田散布地 T-6・8・9掘り下げ。
30日 (月) 鳥博遺跡 T-43写真撮影、実測、埋めもどし。
熊山田散布地 T-6・8・9掘り下げ。T-9埋めもどし。
12月1日 (火) 熊山田散布地 T-6・8・9写真撮影、実測。
真徳貝塚 T-12・13・16・17掘り下げ、写真撮影。
真徳貝塚B T-19・22掘り下げ。
真徳貝塚A T-25掘り下げ。
2日 (水) 熊山田散布地 T-6・8・9埋めもどし。
真徳貝塚 T-12・13・16・17実測。
真徳貝塚B T-19・22掘り下げ。
真徳貝塚A T-25掘り下げ。
3日 (木) 熊山田散布地 T-6埋めもどし。
真徳貝塚 T-16・17埋めもどし。
真徳貝塚B T-18・19・22掘り下げ。
真徳貝塚A T-25掘り下げ、写真撮影。T-23掘り下げ。
4日 (金) 真徳貝塚 T-11・13・17埋めもどし。
真徳貝塚B T-18掘り下げ。T-19・22写真撮影、実測。
真徳貝塚A T-23・24掘り下げ。T-25実測。
5日 (土) 真徳貝塚 T-13埋めもどし。
真徳貝塚B T-18掘り下げ、写真撮影。T-20・21掘り下げ。
真徳貝塚A T-23・24掘り下げ。
7日 (月) 真徳貝塚 T-15埋めもどし。
真徳貝塚B T-18実測、掘り下げ。T-20掘り下げ。
T-22埋めもどし。
真徳貝塚A T-23掘り下げ、写真撮影。T-24・26掘り下げ。
8日 (火) 真徳貝塚B T-18・20・21掘り下げ。T-22埋めもどし。
真徳貝塚A T-24写真撮影。T-25埋めもどし。T-26掘り下げ、写真撮影。
9日 (水) 遺物洗浄作業。
10日 (木) 真徳貝塚B T-18貝層掘り下げ。T-20・21掘り下げ、
写真撮影、実測。
真徳貝塚 T-12・14埋めもどし。
熊山田散布地 T-1掘り下げ。
11日 (金) 真徳貝塚A T-23・24・26実測。
真徳貝塚 T-14埋めもどし。
熊山田散布地 T-1・2・4掘り下げ。
12日 (土) 熊山田散布地 T-1・2・4掘り下げ。T-1溝1写真撮影。
14日 (月) 熊山田散布地 T-1・2・4掘り下げ。
真徳貝塚B T-18埋めもどし。
15日 (火) 遺物洗浄作業。
16日 (水) 真徳貝塚B T-18埋めもどし。
熊山田散布地 T-1溝1掘り下げ、実測、写真撮影。
T-2掘り下げ、実測。T-4掘り下げ。
17日 (木) 真徳貝塚B T-19・20埋めもどし。
熊山田散布地 T-1・2掘り下げ、実測、写真撮影。

- T-4写真撮影。
18日 (金) 真徳貝塚B T-19・21埋めもどし。
熊山田散布地 T-1・2写真撮影、実測。T-3掘り下げ。
19日 (土) 真徳貝塚B T-21埋めもどし。
熊山田散布地 T-1土壤1掘り下げ、写真撮影。T-2埋めもどし。
21日 (月) 熊山田散布地 T-1土壤1写真撮影、実測。T-1・2埋めもどし。T-3掘り下げ、写真撮影、実測。T-5掘り下げ、実測。T-7・10掘り下げ。
22日 (火) 熊山田散布地 T-7・10掘り下げ、写真撮影、実測。T-3・4埋めもどし。T-5写真撮影。
23日 (水) 熊山田散布地 T-5・7・10埋めもどし。
24日 (木) 真徳貝塚A T-23・24埋めもどし。
25日 (金) 真徳貝塚A T-26埋めもどし。
昭和63年
1月5日 (火) 蔵が端貝塚 T-27・28掘り下げ。
円張東貝塚 T-29・30掘り下げ。
6日 (水) 蔵が端貝塚 T-27・28掘り下げ。T-28写真撮影。
船原桿ケ端貝塚 T-33掘り下げ。
7日 (木) 蔵が端貝塚 T-27写真撮影。
円張東貝塚 T-29・30掘り下げ。T-29写真撮影。
船原桿ケ端貝塚 T-33・34掘り下げ。
8日 (金) 蔵が端貝塚 T-27・28実測。
円張東貝塚 T-29・30実測。T-30写真撮影。T-31・32掘り下げ。
船原桿ケ端貝塚 T-33・34・35掘り下げ。T-33写真撮影。
9日 (土) 遺物洗浄作業。
11日 (月) 円張東貝塚 T-31・32掘り下げ。
船原桿ケ端貝塚 T-33実測。T-34写真撮影。T-34・35・37掘り下げ。
12日 (火) 円張東貝塚 T-31・32掘り下げ。T-32写真撮影。T-30埋めもどし。
船原桿ケ端貝塚 T-35・37・38掘り下げ。
13日 (水) 円張東貝塚 T-29・30埋めもどし。T-31写真撮影。
蔵が端貝塚 T-28埋めもどし。
船原桿ケ端貝塚 T-37掘り下げ、写真撮影。T-38掘り下げ。T-35写真撮影。
14日 (木) 円張東貝塚 T-31・32実測。
船原桿ケ端貝塚 T-34・35・37実測。
16日 (土) 船原桿ケ端貝塚 T-38写真撮影、実測。
18日 (月) 蔵が端貝塚 T-27・28埋めもどし。
円張東貝塚 T-31・32埋めもどし。
船原桿ケ端貝塚 T-34・35埋めもどし。
19日 (火) 船原桿ケ端貝塚 T-33・34・35・37・38埋めもどし。
鳥博遺跡 T-39・40・41・42掘り下げ。
20日 (水) 鳥博遺跡 T-39・40・41・42掘り下げ。
21日 (木) 船原桿ケ端貝塚 T-36掘り下げ。
鳥博遺跡 T-39掘り下げ。T-40・41・42写真撮影、
実測。T-41・41埋めもどし。
22日 (金) 鳥博遺跡 T-37写真撮影、実測、埋めもどし。T-40・41埋めもどし。
23日 (土) 鳥博遺跡 T-39埋めもどし。
25日 (月) 鳥博遺跡 T-39埋めもどし。
船原桿ケ端貝塚 T-36埋めもどし。
発掘器材片付け。
26日 (火) 発掘器材片付け。
27日 (水) 発掘器材搬収。

第3章 発掘調査の概要

第1節 熊山田散布地

〔1〕遺跡の位置と現状

熊山田散布地は邑久郡邑久町尾張ほかに所在する。

『岡山県遺跡地図』によると、熊山田散布地は邑久町下笠加から大窪にいたる南北約4km、東西は最大で約1.5kmの範囲が想定されている。この範囲は縄文時代晚期から弥生時代前期に形成された自然堤防（微高地）の範囲にはば一致し、門田貝塚をはじめ著名な遺跡が多く知られている。今回発掘調査の対象となった地域は、灌漑排水路事業の計画されている地域で、この熊山田散布地の南東部から南にかけての地域にあたる。現状では水田になっている。

〔2〕発掘調査の方法と調査結果の概要

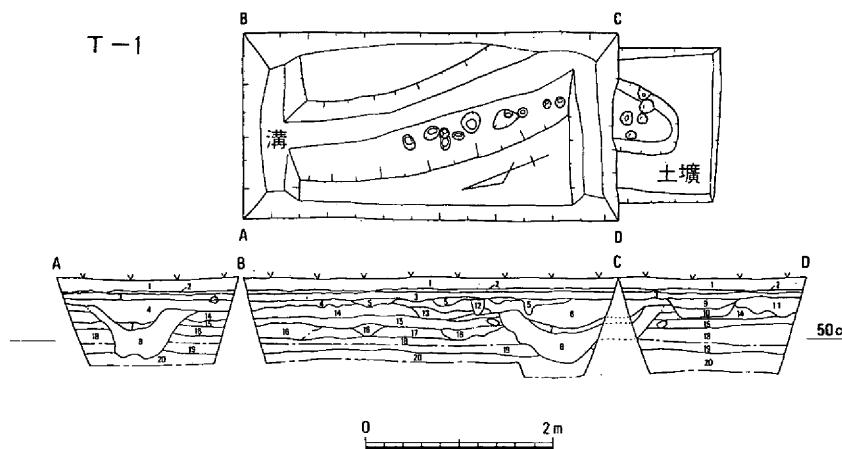
発掘調査は、灌漑排水路事業計画との関連で邑久町立病院前から岡山ブルーハイウェイまでの南北に走る町道沿いの水田にトレッソを10本（T-1・2・3・4・5・6・7・8・9・10）設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面作成、写真撮影等を行った。

調査の結果、T-1では現水田層下に灰白色粘土層が約10cmの厚さで認められる（図の3層）。この土層からは弥生時代中期・後期や古墳時代から奈良・平安時代の須恵器、土師器および時期不詳のサヌカイト片・羽口が出土しており、中世の包含層と考えられる。この層の下面、現表土面マイナス約20cmに弥生時代の遺構面が存在し、土壌と溝が検出された。土壌は推定130×70cmの長楕円形を呈する。深さは約20cmを測り、埋土は2層にわかれ。上層（図の9層）中には多くの炭片および少量の焼土粒とともに製塙土器の小破片と石鎌が認められた（第25図8・9、第30図205）。時期は弥生時代後期後半であろう。この土壌は底面に焼土面等は認められず、製塙土器を中心とした廃棄壌と考えられる。溝は幅約1m、深さ約50cmを測り、ほぼ南北にカーブして検出された。西の肩部には一部小穴が認められ、杭が打たれていたのかも知れない。遺物は土器片が数片出土したのみである。時期は明確ではないが弥生時代中期中頃と考えられる。黄色に近い弥生時代の遺構面より下層には灰色の土層（図の15・16・17層）が存在するが、遺物は出土しなかった。最下層は細砂でそれより下層は砂と粘土の互層になる。

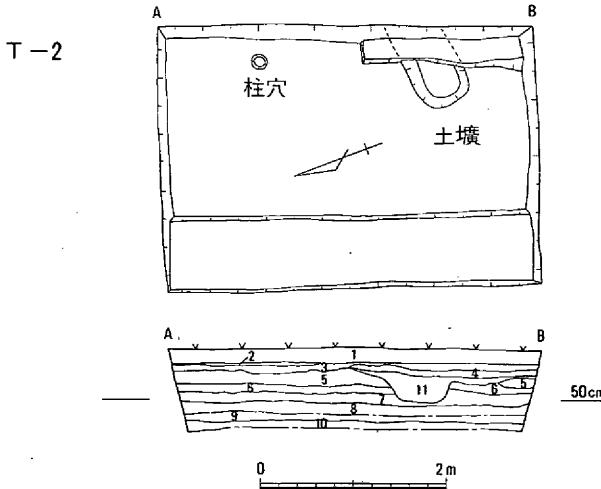
T-2の基本的な層序はT-1と同様で、図の3層は中世の包含層、4層は古墳時代の包含層と考えられ、弥生土器、須恵器、土師器が出土している。現表土面マイナス約25cmに弥生時代の遺構面が存在し、土壌、柱穴が検出された。これらの遺構からは遺物は出土しなかったが、時期は弥生時代のものと考えられる。



第5図 熊山田散布地トレンチ位置図(1/5000)

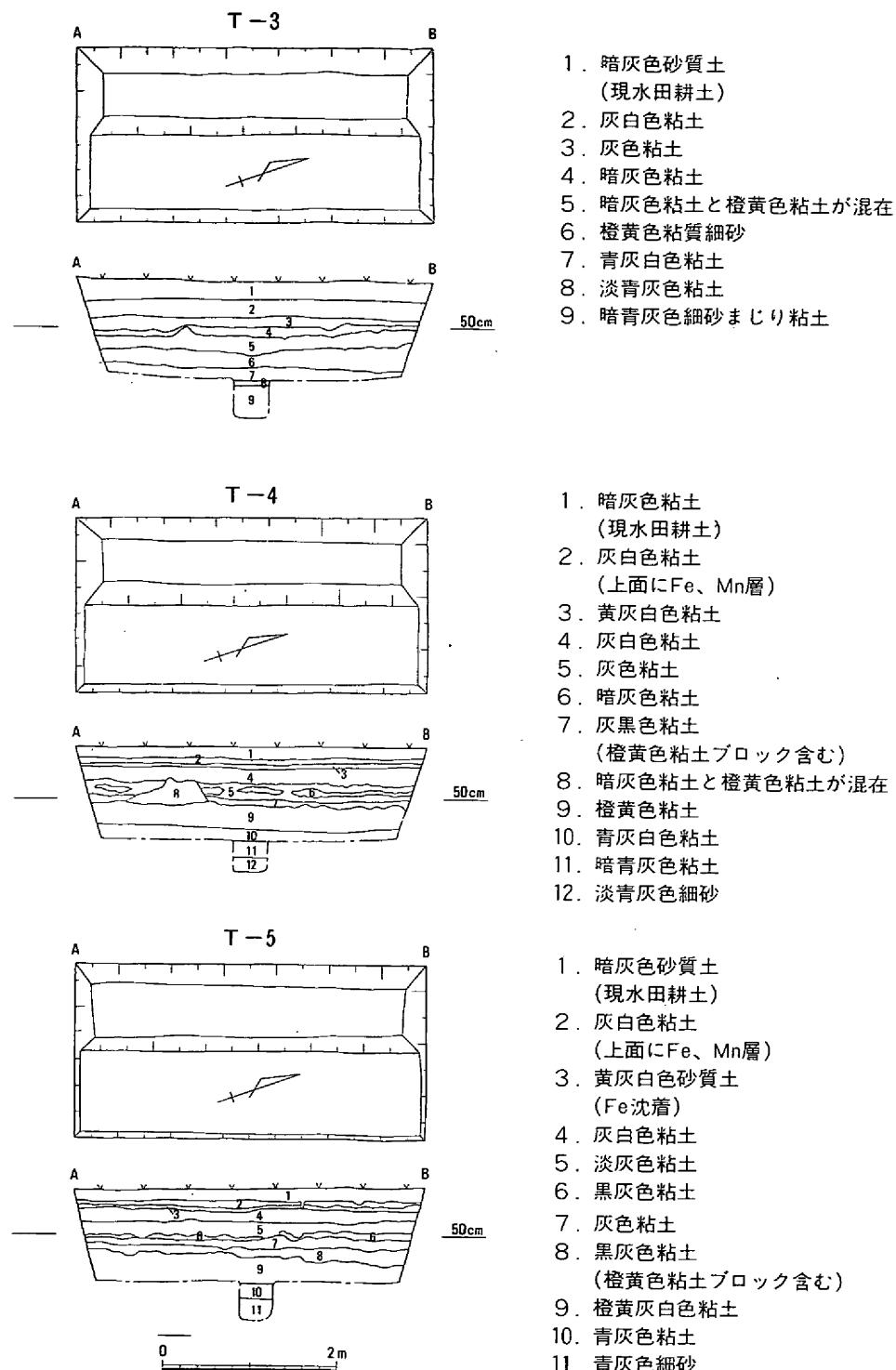


- | | | |
|----------------------|----------------------------|-------------------|
| 1. 褐灰色砂質土
(現水田耕土) | 8. 黄褐色粘土 | 16. 灰色粘土 |
| 2. 灰白色砂質土 | 9. 暗褐色砂質土(土壤)
(炭・焼土粒含む) | (橙黄色粘土小ブロック含む) |
| 3. 灰白色粘土
(中世) | 10. 褐灰色砂質土(土壤) | 17. 淡黄灰色粘土 |
| 4. 茶灰色砂質土 | 11. 淡褐灰色粘質土 | 18. 白黄色粘土
(Fe) |
| 5. 淡灰色粘土 | 12. 淡褐灰色粘土 | 19. 灰白色粘土 |
| 6. 淡灰褐色砂質土 | 13. 黄褐色白色粘質土 | 20. 灰白色細砂 |
| 7. 暗褐灰色砂質土 | 14. 淡黃色砂質土 | |
| | 15. 淡灰色粘土 | |

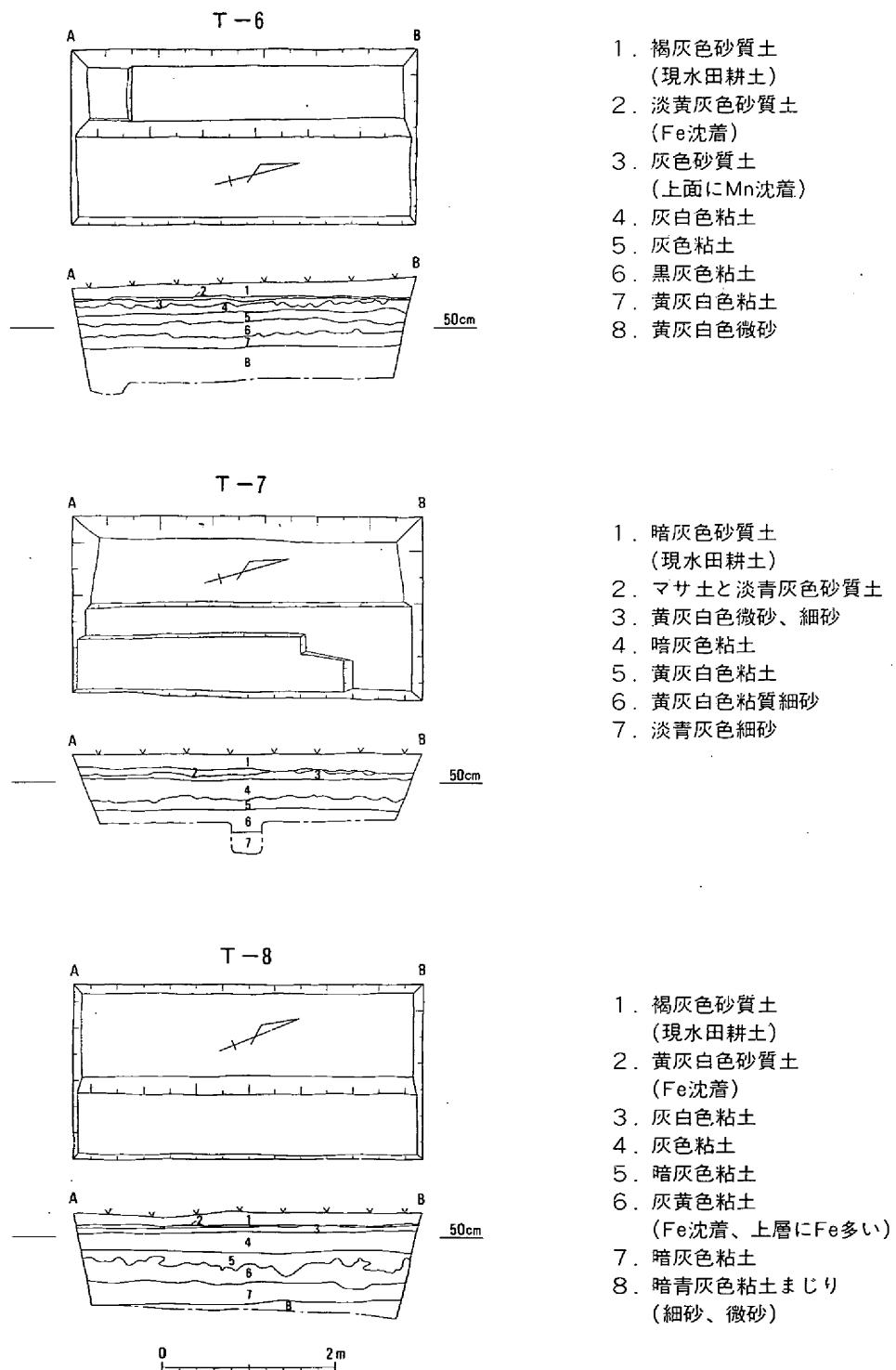


- | | |
|----------------------|---------------------------------|
| 1. 褐灰色砂質土
(現水田耕土) | 6. 灰色粘土 |
| 2. 灰白色砂質土 | 7. 橙黄色粘土 |
| 3. 淡灰色粘土
(中世) | 8. 黄灰白色粘土 |
| 4. 淡褐色粘質土 | 9. 灰白色粘土 |
| 5. 淡灰黄色粘土 | 10. 灰白色細砂 |
| | 11. 褐灰色粘土(土壤)
(褐白色粘土ブロックを含む) |

第6図 熊山田散布地 T-1・2 平・断面図(1/80)



第7図 熊山田散布地 T-3・4・5平・断面図(1/80)

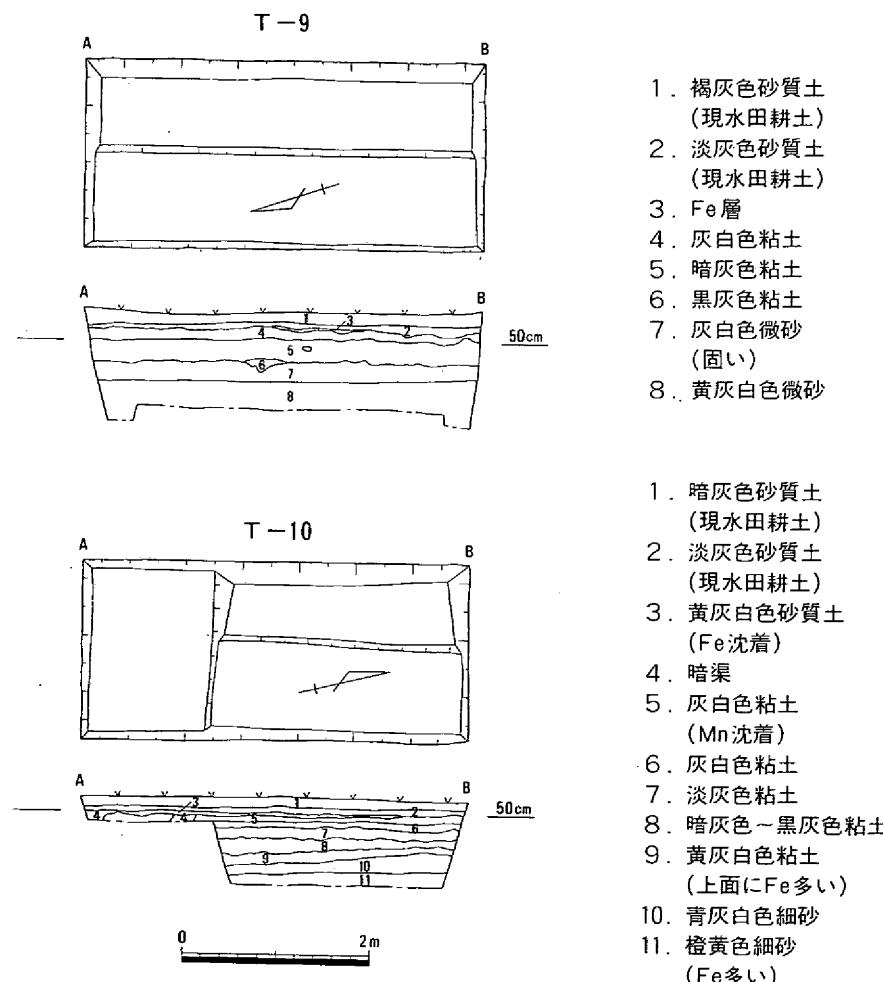


第8図 熊山田散布地 T-6・7・8平・断面図(1/80)

T-3・4・5・6においてはいずれも遺構は検出されず、ほぼ同じような層序が認められた。現水田層下に厚さ20~30cmの灰色~灰白色の粘土層が認められ、この層はT-3・5で出土した土器から中世の包含層と考えられる。また、T-1・2で認められたような弥生時代の遺構面は存在しない。

T-7・8・9・10においても、遺構や遺構面は認められなかった。いずれのトレンチでも現水田層下に灰白色粘土層、暗灰色粘土層が認められ、湿地に近い状況が伺える。この土層中からは各トレンチで中世の遺物が出土している。最下層は、T-7・9・10が細砂で、T-8は粘土まじりの細砂であり、遺物は出土しなかった。

以上のように今回の調査では、T-1・2の付近までは弥生時代以降の集落跡の存在が確認でき、T-3より南に関してはわずかな遺物を含む中世の包含層は認められるもののそれ以前の遺構、および遺物包含層は確認できなかった。



第9図 熊山田散布地 T-9・10平・断面図(1/80)

第2節 真徳貝塚 しんとく

〔1〕遺跡の位置と現状

真徳貝塚は邑久郡邑久町山手真徳に所在する。

遺跡は、千町平野の北に位置する標高約135mの高砂山の丘陵南端部から約100m南の平野部に想定されている。現状はすべて水田となっており、貝や土器などの散布は認められない。

〔2〕発掘調査の方法と調査結果の概要

発掘調査は、遺跡の存在が想定されている各水田に 2×4 mのトレンチを7本(T-11~17)設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面作成・写真撮影等を行った。

調査の結果、T-11・12・13・15・16・17はほぼ同一の層序を示しており、現水田層下に20~50cmの厚さで淡灰色粘土、暗灰色粘土、黒灰色粘土が堆積していた。この堆積層中からは、T-11において中世の須恵器、土師器、備前焼が、またT-12において弥生土器が少量出土している。この堆積層の下には黄灰白色の粘土層が10~30cm認められ、この層が中世段階の基盤層になるものと考えられる。これより下層は暗褐灰色粘土から暗青灰色粘土に変化し、下層になるほど砂質が強くなる。黄灰白色粘土層より下層からはいずれのトレンチでも遺物は出土しなかった。また、T-11・15・16の最下層からは植物の根や木片が認められた。

T-14の層序は他のトレンチと異なっており、黄灰白色の粘土層は存在しない。また、図の8・9・10層はピート質に近い土層で、植物の葉や木片が多く認められた。

以上のように、調査対象地においては貝の出土は一点もなく貝塚は認められなかった。また、中世土器を含む黒色に近い粘土層の存在から、当該地が中世においても湿地の状況を呈していたであろうことが伺えた。中世以前の状況についても、生活面は認められなかった。

第3節 真徳貝塚A しんとく

〔1〕遺跡の位置と現状

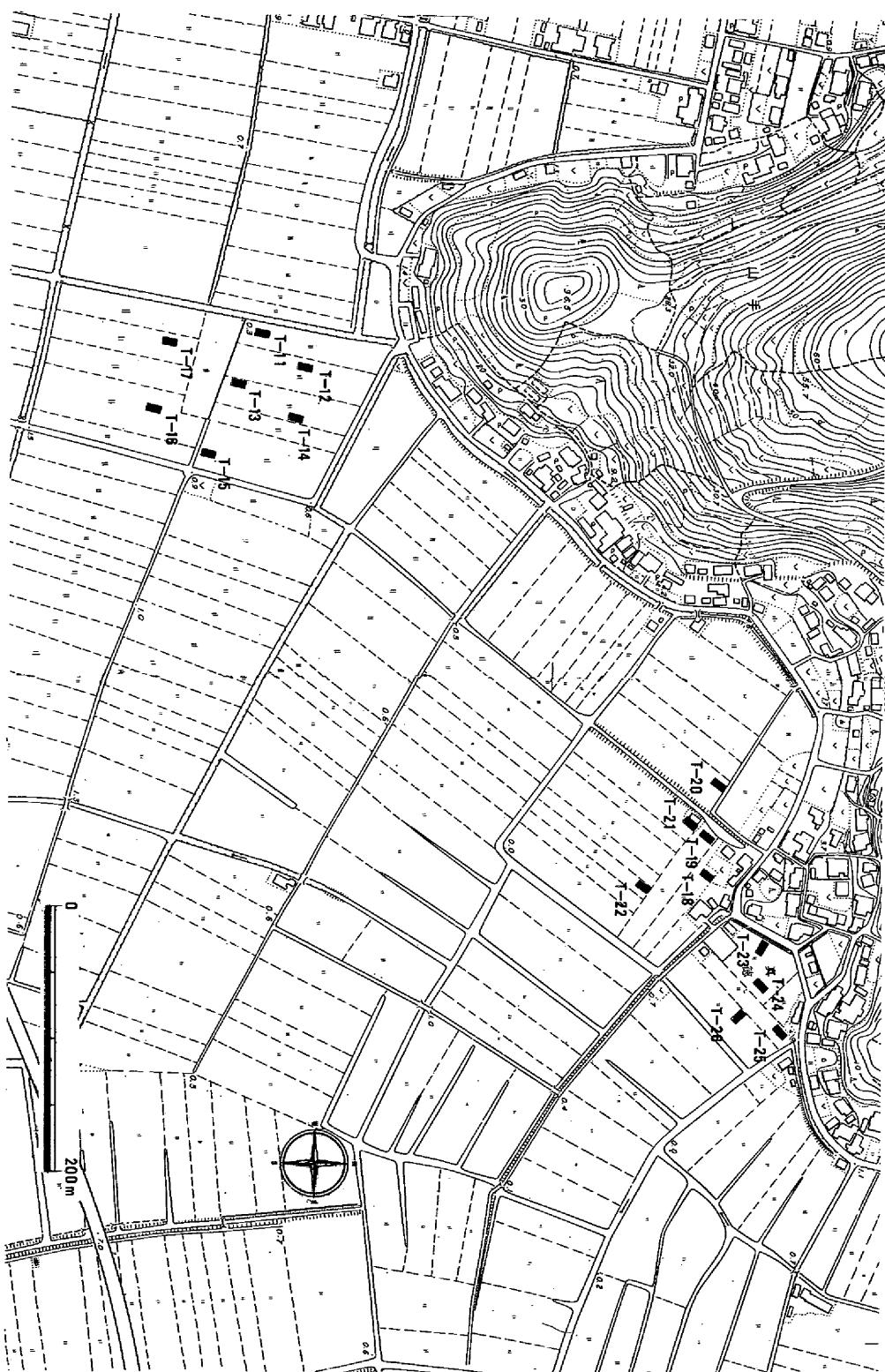
真徳貝塚Aは邑久郡邑久町山手真徳に所在する。

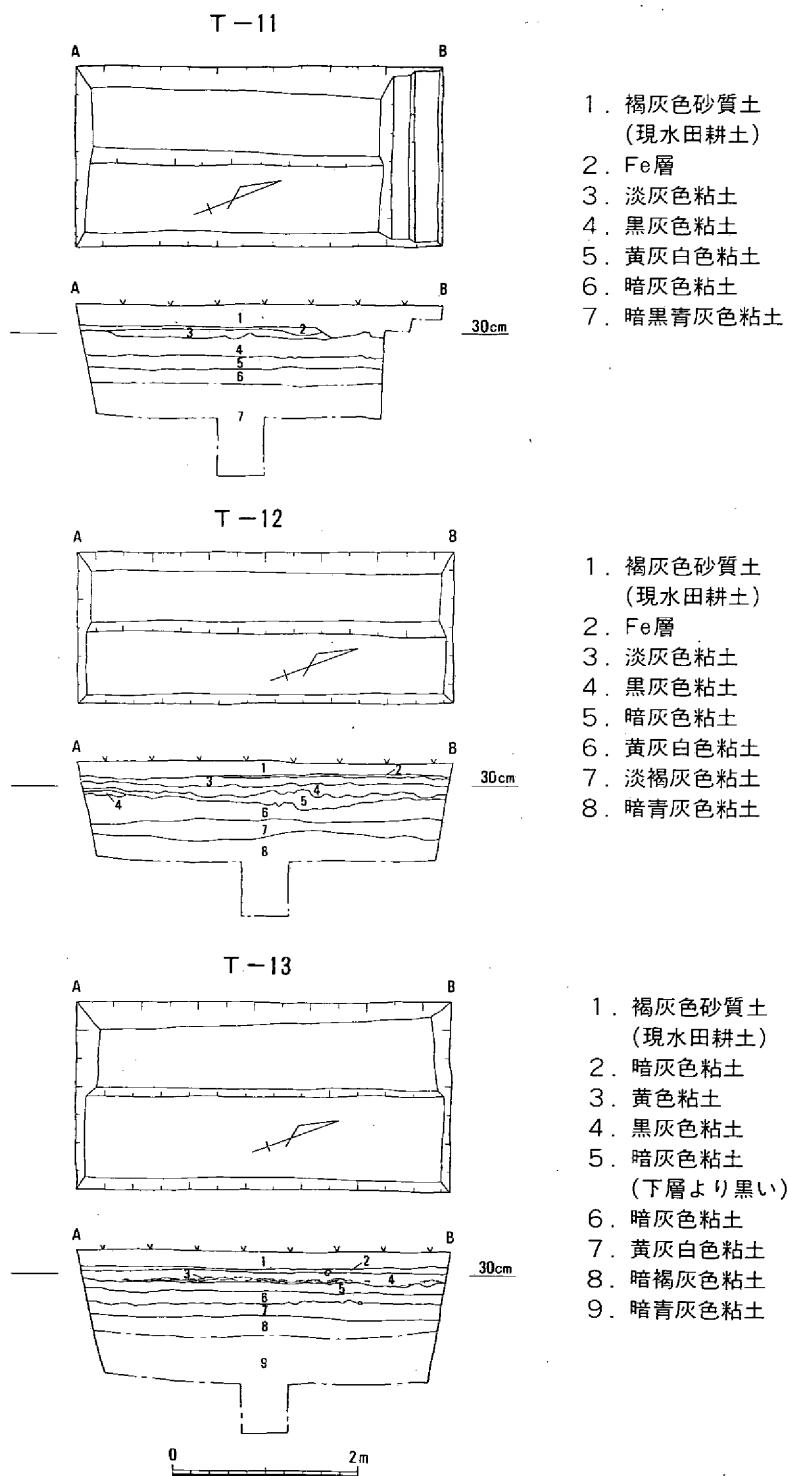
遺跡は、千町平野の北に位置する標高約135mの高砂山の丘陵南東裾部から平野部にわたって想定されており、かつて貝(カキ)や弥生土器・サヌカイト片が採集されている。そのうち発掘調査の対象となったのは平野部で、現状では水田になっており、貝や土器などの散布は認められなかった。

〔2〕発掘調査の方法と調査結果の概要

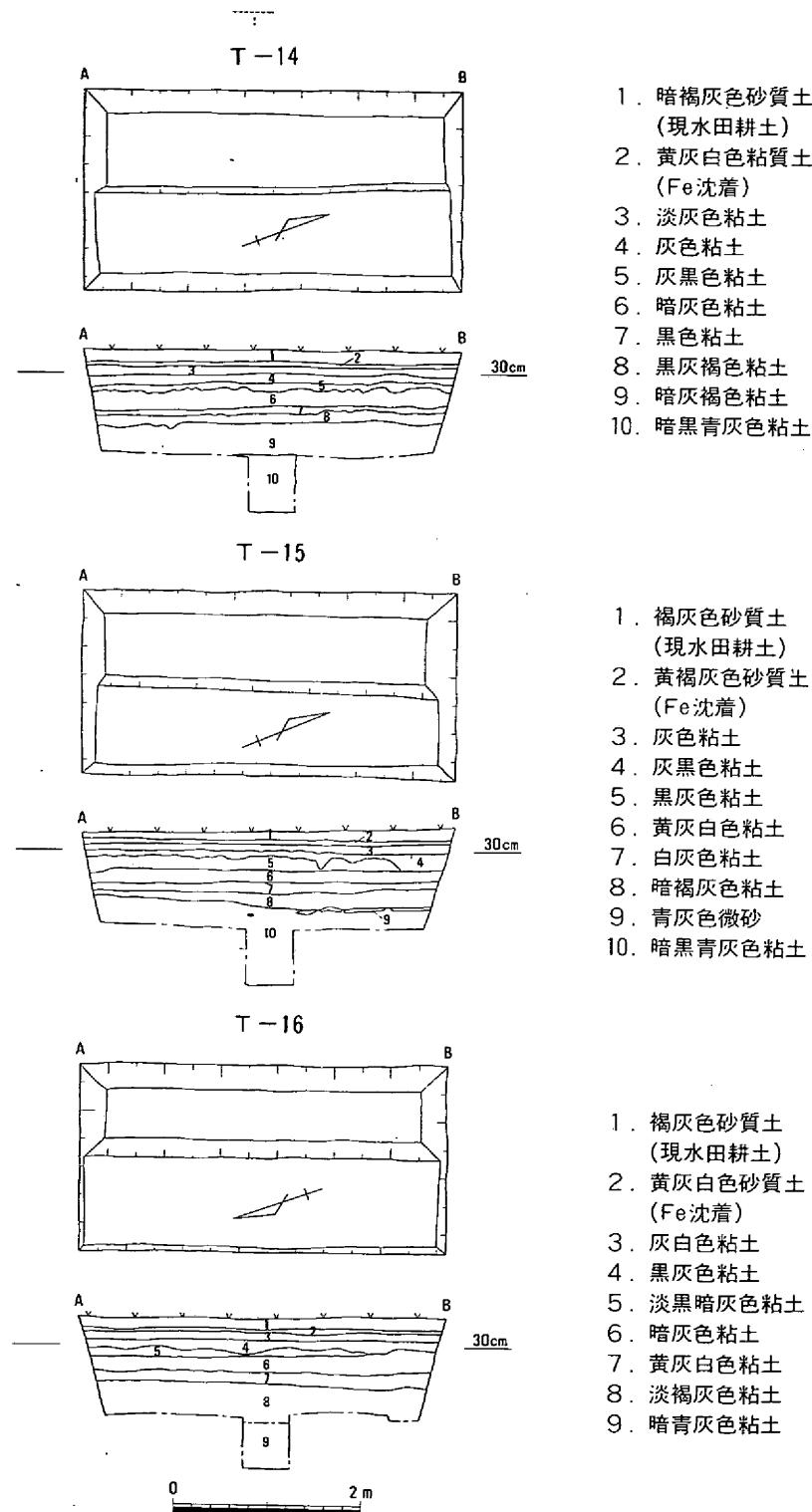
発掘調査は、遺跡の存在が想定されている各水田に 2×4 mのトレンチを4本(T-23・24・25・26)設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面作成・写真撮影等を行った。

第10図 真徳貝塚、真徳貝塚A、真徳貝塚B、トレンチ位置図(1/5000)

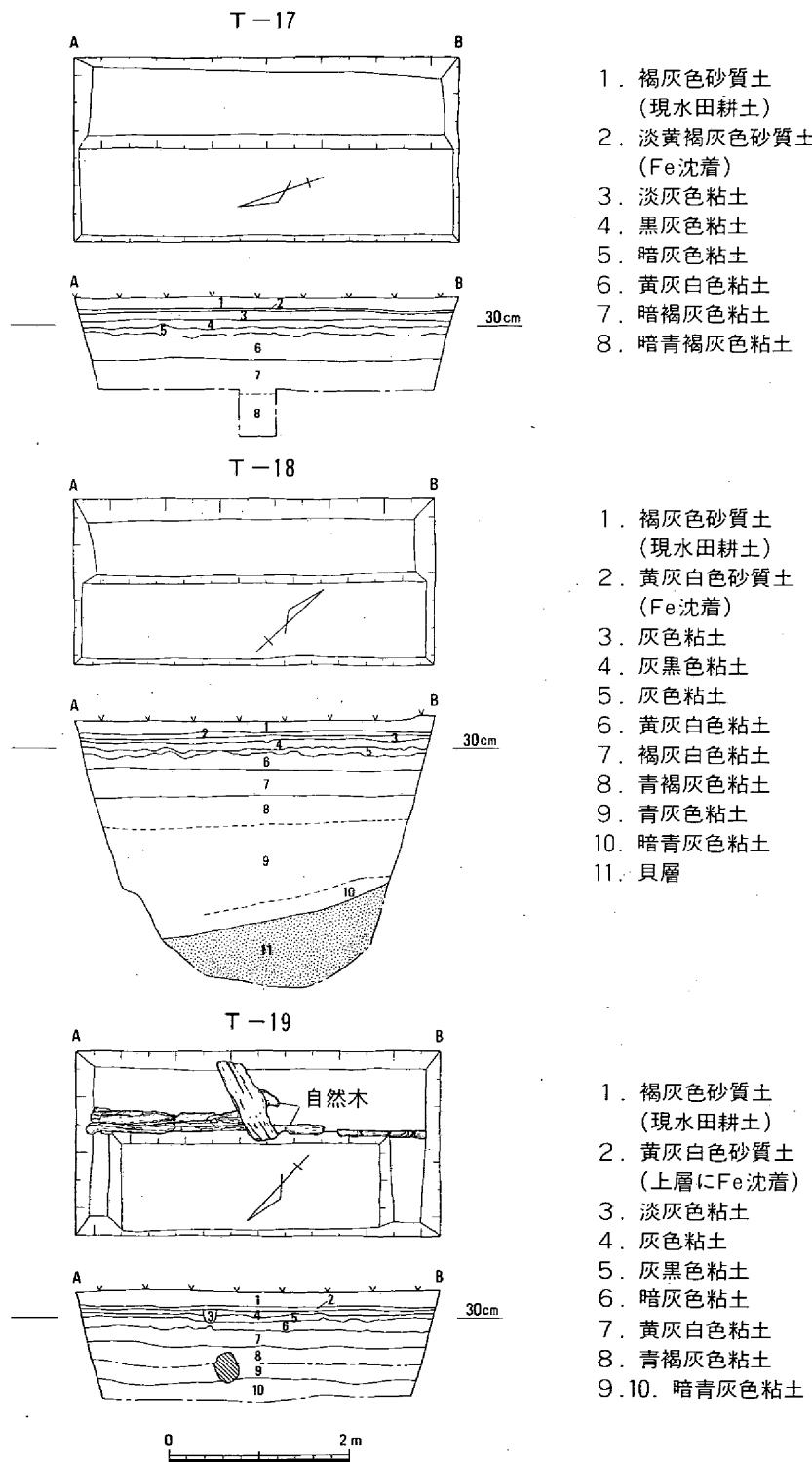




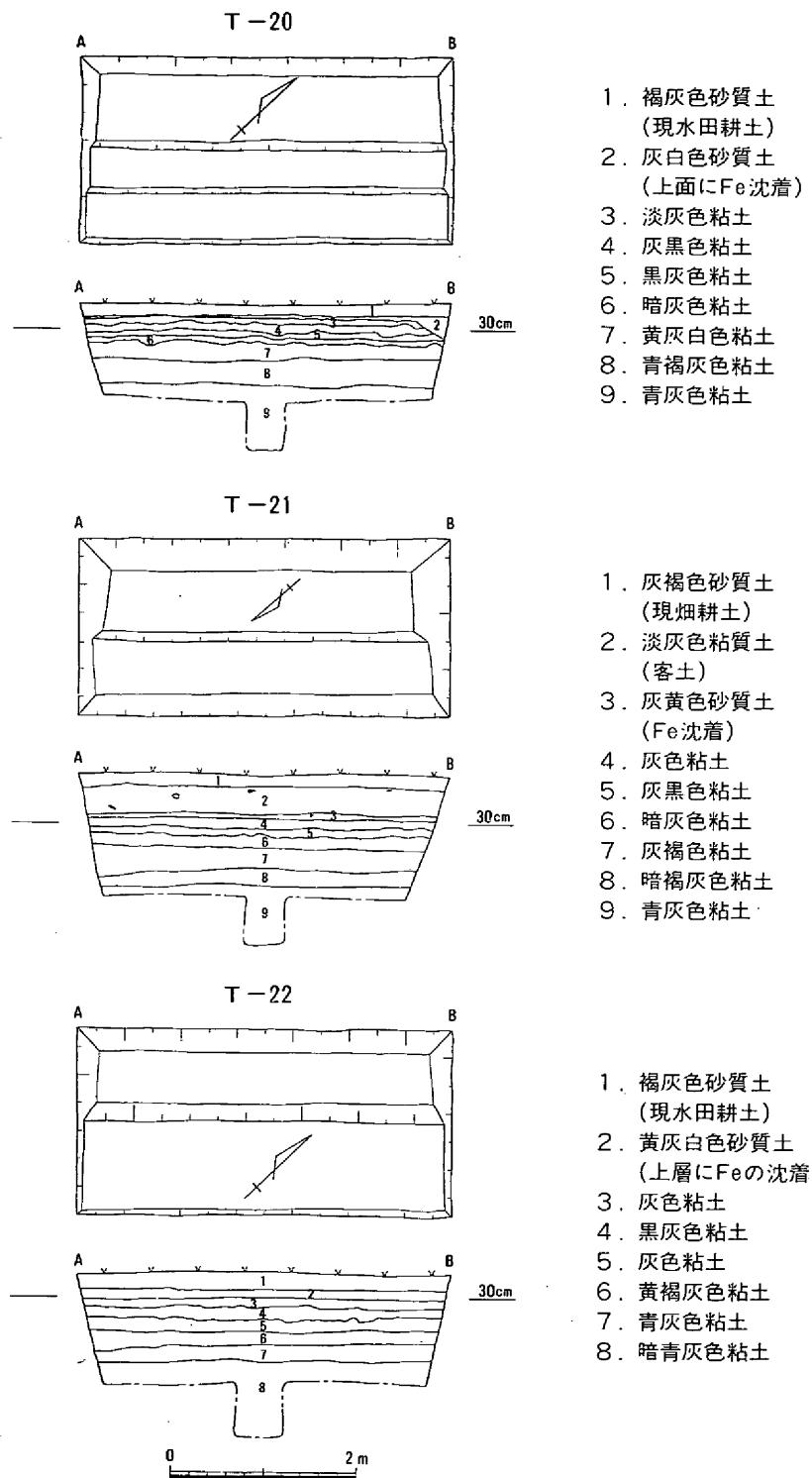
第11図 真徳貝塚 T-11・12・13 平・断面図(1/80)



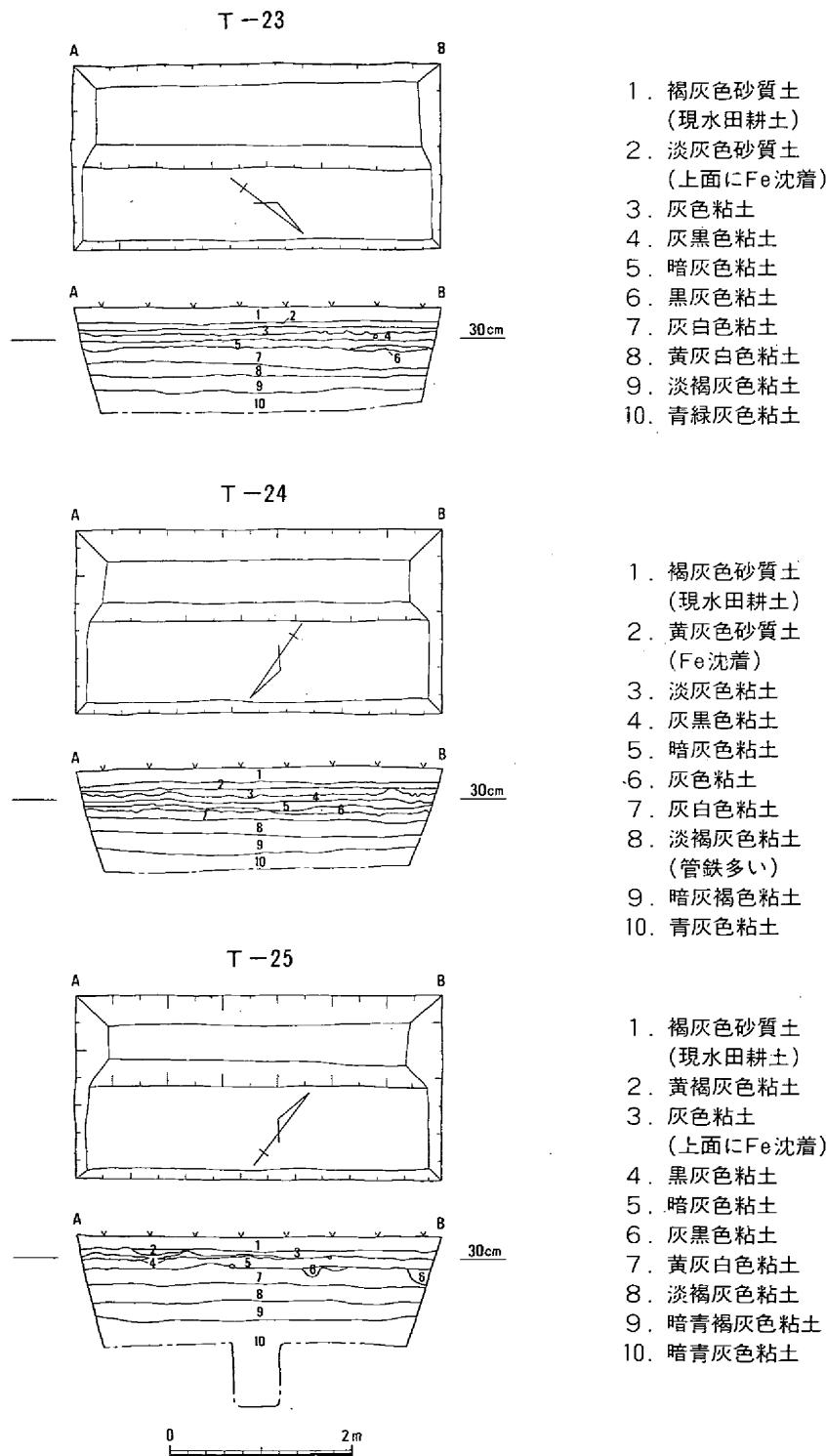
第12図 真徳貝塚 T-14・15・16 平・断面図(1/80)



第13図 真徳貝塚・真徳貝塚B T-17・18・19 平・断面図(1/80)



第14図 真徳貝塚B T-20・21・22平・断面図(1/80)



第15図 真徳貝塚A T-23・24・25平・断面図(1/80)

調査の結果、遺構はすべてのトレンチで検出されなかった。T-23・24・25・26の各トレンチにおいて基本的な層序は同じで、現水田下に20~30cmの厚さで淡灰色~灰黒色の粘土層が堆積している。この土層中からは、T-23において弥生時代前期~中期の土器、埴輪、古墳時代から奈良・平安時代の須恵器が、T-24において弥生時代前期~中期の土器、古墳~奈良時代の須恵器、中世の土師器が、T-25において弥生時代前期~中期の土器、亀山焼(第25図15)などの中世の須恵器・土師器、T-26において弥生土器、古墳~奈良・平安時代の須恵器、中世の土師器・須恵器が少量出土している。この土層の下には灰白色~黄灰白色の粘土層があり、最下層では青灰色粘土に近くなっている。これらの土層では遺物は出土せず、最下層はピート質に近い土層である。

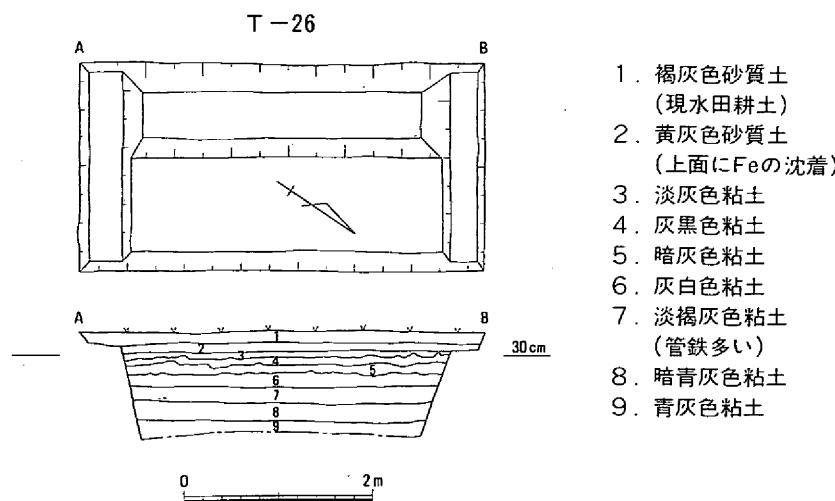
以上のように、調査対象地においては貝は一点も存在せず貝塚は確認できなかった。また、その他の遺構も存在せず、遺物も少量の中世土器などが出土したのみであった。当該地の土層は第2節で記した真徳貝塚とほぼ同様であり、中世のある段階まで湿地を呈していたものと考えられ、中世以前の生活面も認められなかった。

第4節 真徳貝塚B

(1) 遺跡の位置と現状

真徳貝塚Bは邑久郡邑久町山手真徳に所在する。

遺跡は、千町平野の北に位置する標高約135mの高砂山の丘陵南東裾部から平野部にわたって想定されており、かつて貝(シジミ)や弥生土器、サヌカイト片が採集されている。第3節で記した真徳貝塚Aの南西約100mに位置する。発掘調査の対象となったのは平野部分で、現状では水田・畑地になっており、貝や土器の散布はみられなかった。



第16図 真徳貝塚A T-26平・断面図(1/80)

[2] 発掘調査の方法と調査結果の概要

発掘調査は、遺跡の存在が想定されている各水田に 2×4 mのトレンチを5本（T-18・19・20・21・22）設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面作成・写真撮影等を行った。

調査の結果、T-19・20はほぼ同一の層序を示しており、現水田下に20~30cmの灰色~灰黒色の粘土層が存在する。その下に黄灰白色粘土層があり、最下層は暗青灰色粘土層になる。遺物は、T-20の灰色~灰黒色粘土層から弥生土器と中世の須恵器、備前焼が少量出土した。T-19では土器などの遺物は出土しなかったが、黄灰白色粘土の下層に径30cm前後の自然木が検出された。

T-21・22においても厚さ30cm前後の灰色~灰黒色粘土層が存在するが、その下に黄灰白色的粘土層は認められない。T-22では遺物は出土しなかったが、T-21では図の2~6層から弥生土器や中世の須恵器が少量出土した。

T-18では貝層が確認された。貝層より上層は他のトレンチと同様の層序を示し、図の3~5層が灰色~灰黒色の粘土層で6層が黄灰白色粘土層である。3~5層中からは弥生時代前期~後期土器や埴輪、中世の須恵器・土師器・瓦器などが出土した。また、6層（第25図13）および9層中の上層（第25図16）から縄文時代後期の土器が出土した。

貝は10層から土に混在して出土しはじめ、11層はほぼ純粹な貝層である。ただし、11層中には礫（10~15cm）や岩が多く存在する。このため、貝層の掘り下げは困難を極め、貝層の厚さを明確に確認することができなかったが、ピンポールによる確認の結果、図示したように約80cmの厚さまでは確認できた。貝層はほぼ北東から南西にむかって傾斜して検出された。

検出された貝の種類はカキが殆どを占め、他に少量のオキシジミ・ハイガイ・ヤマトシジミ・ウネナシトマヤガイ・アカニシ・ウミニナ・カワアイガイ・ヘナタリなどが認められる。また、貝層中からは、魚骨（ボラあるいはクロダイ・エイなど）や鱗、小形動物の脊椎骨、炭化物（種子、木材）などが確認できた（註）。

以上のように、調査対象地内においては丘陵に最も接近しているT-18において縄文時代後期以前と考えられる貝層が確認された。貝層は現地表下約180cm~240cm（海拔マイナス約1.1~1.8m）で検出された。他のトレンチでは遺構は検出されず真徳貝塚や真徳貝塚Aとほぼ同様の状況であった。

（註）貝層中の遺物の整理は有森万久君が中心となって実施した。貝や魚骨の同定についても同君の教示のもとに筆者の責任において行ったものであり、専門家の鑑定については後日を期したい。

第5節 蔵が端貝塚

(1) 遺跡の位置と現状

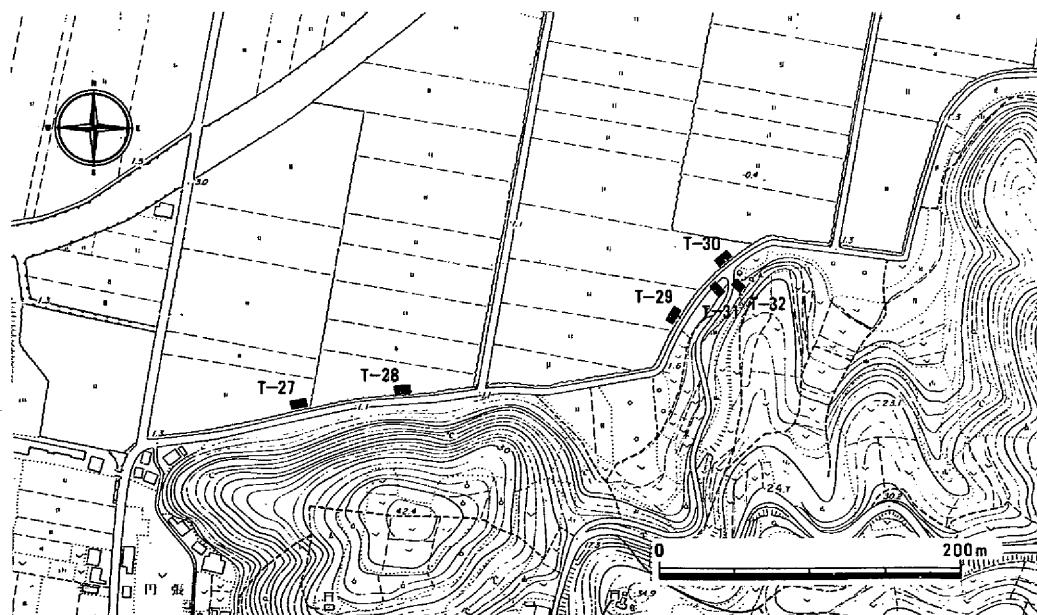
蔵が端貝塚は邑久郡邑久町豊原円張に所在する。

遺跡は、千町平野の南に位置する標高約40mの小丘陵の北裾部および平野部に想定されており、かつて貝や弥生土器が採集されている。発掘調査の対象となったのは平野部分で、現状では水田になっており貝や土器の散布はみられなかった。

(2) 発掘調査の方法と調査結果の概要

発掘調査は、遺跡の存在が想定されている水田に $2 \times 4\text{ m}$ のトレンチを2本(T-27・28)設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面作成、写真撮影等を行った。

調査の結果、T-27・28のいずれのトレンチにおいても貝塚等の遺構は検出されなかった。遺物もT-27では図の3~6層中から弥生時代前期の土器および中世の土師器が、またT-28では図の3~6層中から弥生時代前期の土器およびサヌカイト片がごく少量出土したのみである。この2つのトレンチの基本的な層序から考えて調査対象地は、先に記した真徳貝塚等と同様に中世のある段階まで湿地状を呈しており、それ以前においても生活面等は存在しないものと考えられる。



第17図 蔵が端貝塚、円張東貝塚トレンチ位置図 (1/5000)

第6節 円張東貝塚

(1) 遺跡の位置と現状

円張東貝塚は邑久郡邑久町豊原円張に所在する。

遺跡は、千町平野にむかって南からのびる標高約10mの低丘陵の北西裾部および平野部に想定されており、かつて貝や弥生土器、石器が採集されている。今回の発掘調査対象地の現状は水田、畑地、荒蕪地などになっている。

(2) 発掘調査の方法と調査結果の概要

発掘調査は、遺跡の存在が想定されている水田、畑、荒蕪地に $2 \times 4\text{ m}$ (T-29)、 $2 \times 5\text{ m}$ (T-30)、 $1.4 \times 5\text{ m}$ (T-31)、 $1.5 \times 3\text{ m}$ (T-32)のトレンチを合計4本設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面作成、写真撮影等を行った。

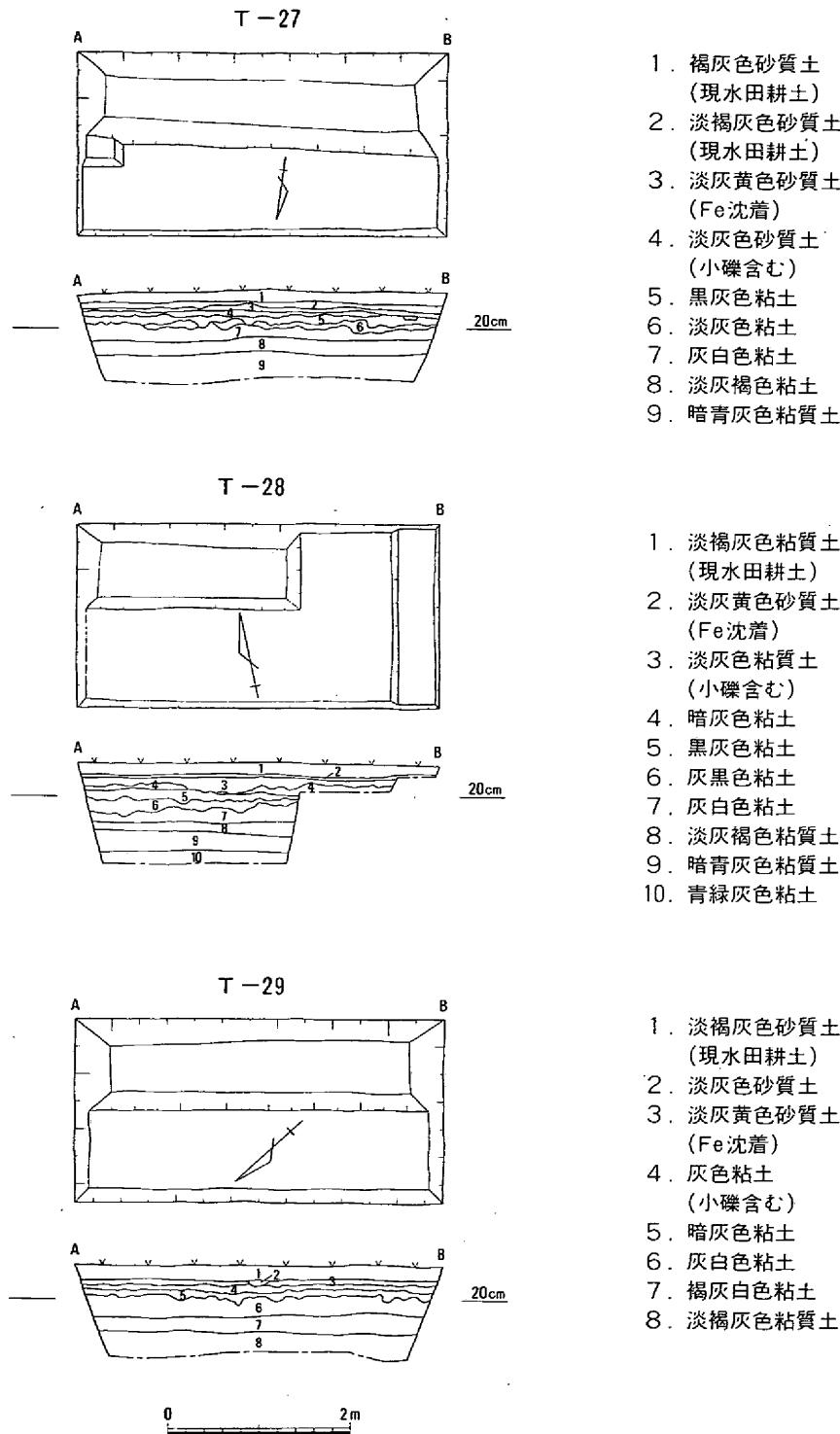
調査の結果、T-29では現水田層下に少量の中世土器を含む灰色～暗灰色粘土が堆積しており、その下層には灰白色粘土が存在していた。遺構は存在しない。

T-30では現水田層下に少量の中世土器を含む淡灰色粘土層が認められ、その下層には灰色～暗灰色粘土と灰黒色粘土が互層に存在していた(図の5～11層)。そして、これらの土層中からコンテナ約1箱分の弥生時代前期土器、土製紡錘車や扁平石斧、サヌカイト製石器などが出土した。また、12層からは縄文時代晚期らしい土器片が出土している(第25図17・18・22)。しかし遺構は存在せず、出土した土器も東方の丘陵から流れ込んだものと考えられる。

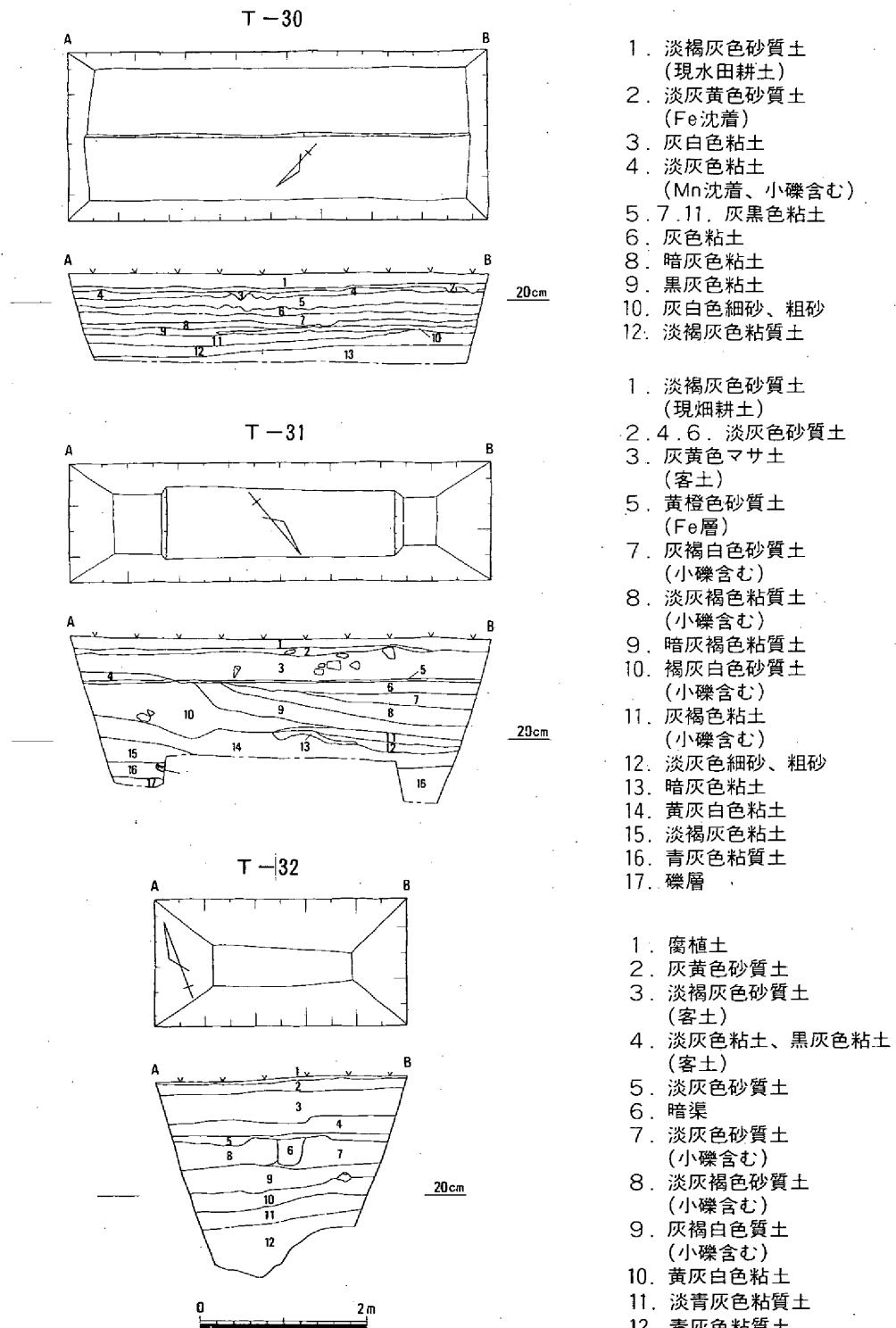
T-31は丘陵に接近した部分に設定したトレンチでT-29・30とは異った状況を示していた。図の3層は客土で、4層は10数年前の水田層である。土層は南東から北西(丘陵部から平野部)に傾斜しており、遺構は検出されなかったが、6～13層中から弥生時代前期から中世に至る土器、石器がコンテナ約2箱分出土した。各土層の時期については明確ではないが、6～8層が中世、10～13層が弥生時代前期ではないかと考えられる。また、14～16層は粘土または粘質土で、丘陵はこのトレンチの位置まではのびていなかったことが伺える。

T-32は第1章で記した貝層の南西約10mの位置に設定したトレンチである。図の3、4層は客土で、5層は旧水田層である。遺構は検出されなかったが、7～9層中から弥生土器、中世土器、土製紡錘車、石器(磨製石庖丁、砥石など)などがコンテナ約1箱分出土した。各土層の時期については明確ではないが、7・8層が中世、9層が弥生時代前期ではないかと考えられる。また、11・12層中からは縄文時代後～晚期らしい土器片(第26図58)および貝(シジミ)が数点出土している。12層の下は岩盤である。

以上のように今回の調査においては、遺構は確認できなかったが、丘陵に近いトレンチにおいて多くの土器や石器を含む弥生時代から中世の包含層が認められた。



第18図 蔵が端貝塚・円張東貝塚 T-27・28・29 平・断面図(1/80)



第19図 円張東貝塚 T-30・31・32平・断面図(1/80)

第7節 船原梶ヶ端貝塚

(1) 遺跡の位置と現状

船原梶ヶ端貝塚は邑久郡邑久町下山田舟原に所在する。

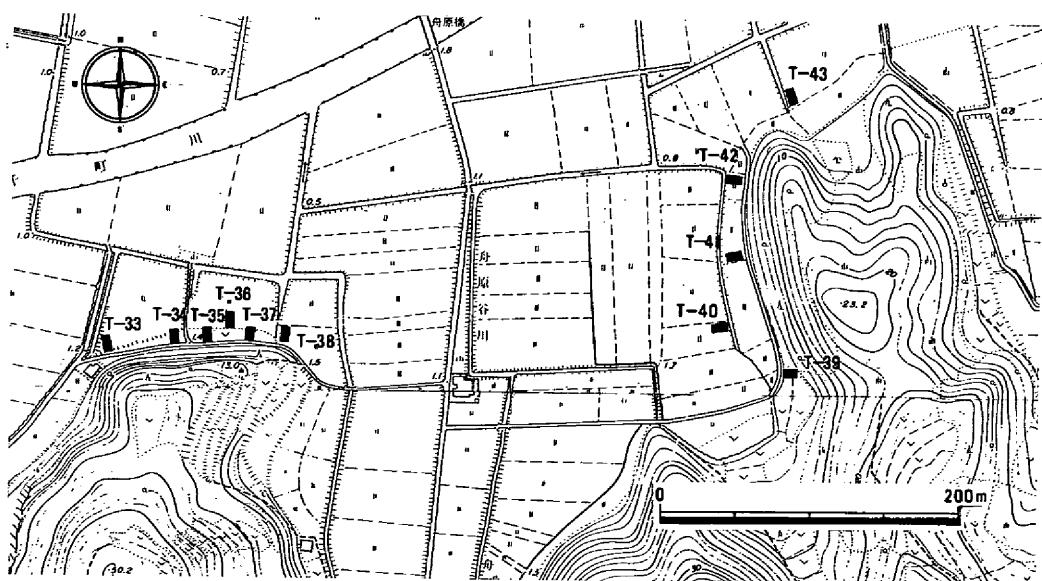
遺跡は、千町平野にむかって南からびる標高約20mの舌状丘陵上から平野部に想定されており、かつて貝や土器、石器が採集されている。発掘調査の対象となったのは平野部分で、現状では水田、畑地になっており、畑地には土器、サヌカイト片の散布が多く認められる。

(2) 発掘調査の方法と調査結果の概要

発掘調査は、遺跡の存在が想定されている水田、畑地に 2×4 mのトレンチを6本(T-33・34・35・36・37・38)設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面形成、写真撮影等を行った。

調査の結果、T-33・36はほぼ同一の層序を示しており、図の3層は中世包含層である。T-36の5層は中世以降の溝の可能性が高いが明確ではない。遺物は、T-33から弥生土器、瓦器、石器、T-36からは弥生土器、中世土器、石器などが少量出土している。

T-34・35はほぼ同一の層序を示している。遺構は検出されなかったが、図の3～6層は中世包含層で、T-34からは弥生土器、奈良～平安時代の須恵器・土師器、石錘、サヌカイト片などがコンテナ1箱分、T-35からは弥生土器、古墳時代から奈良～平安時代の須恵器、中世の須恵器・土師器、備前焼、白磁、石鏡、サヌカイト片などがコンテナ1箱分出土している。また、T-35の8・9層中には自然木が多く、9層中からは弥生時代前期の土器片がまとま



第20図 船原梶ヶ端貝塚、鳥博遺跡トレンチ位置図(1/5000)

て出土した。さらに、出土層は不明であるが、T-34から玉髓の破片が、T-35からはサヌカイト製のナイフ形石器（第30図184）が出土している。

T-37からも弥生時代から中世にいたる土器や石器（磨製石庖丁など）などがコンテナ3箱分出土した。これらはおもに図の3～11層中から出土している。特に6、7層からの出土が多い。これら各土層の時期は明確ではないが、いずれも中世のものと考えられる。土器は弥生時代前期から後期のものが多く、製塩土器も出土している。また、瓦器も出土している。

T-38においても、おもに図の2～7層中において弥生時代から中世にいたる土器、石器がコンテナ1箱分出土した。土器は弥生時代前期から中期のものが多く、柱状片刃？石斧（第30図189）も出土している。

以上のように今回の調査においては、丘陵に接近する畠地に設定したT-34・35・37・38を中心に多量の遺物を含む中世の包含層が確認された。しかし、明確な遺構は認められず、遺物はいずれも丘陵部からの流れ込みと考えられる。

第8節 鳥博遺跡

〔1〕遺跡の位置と現状

鳥博遺跡は邑久郡邑久町下山田鳥博に所在する。

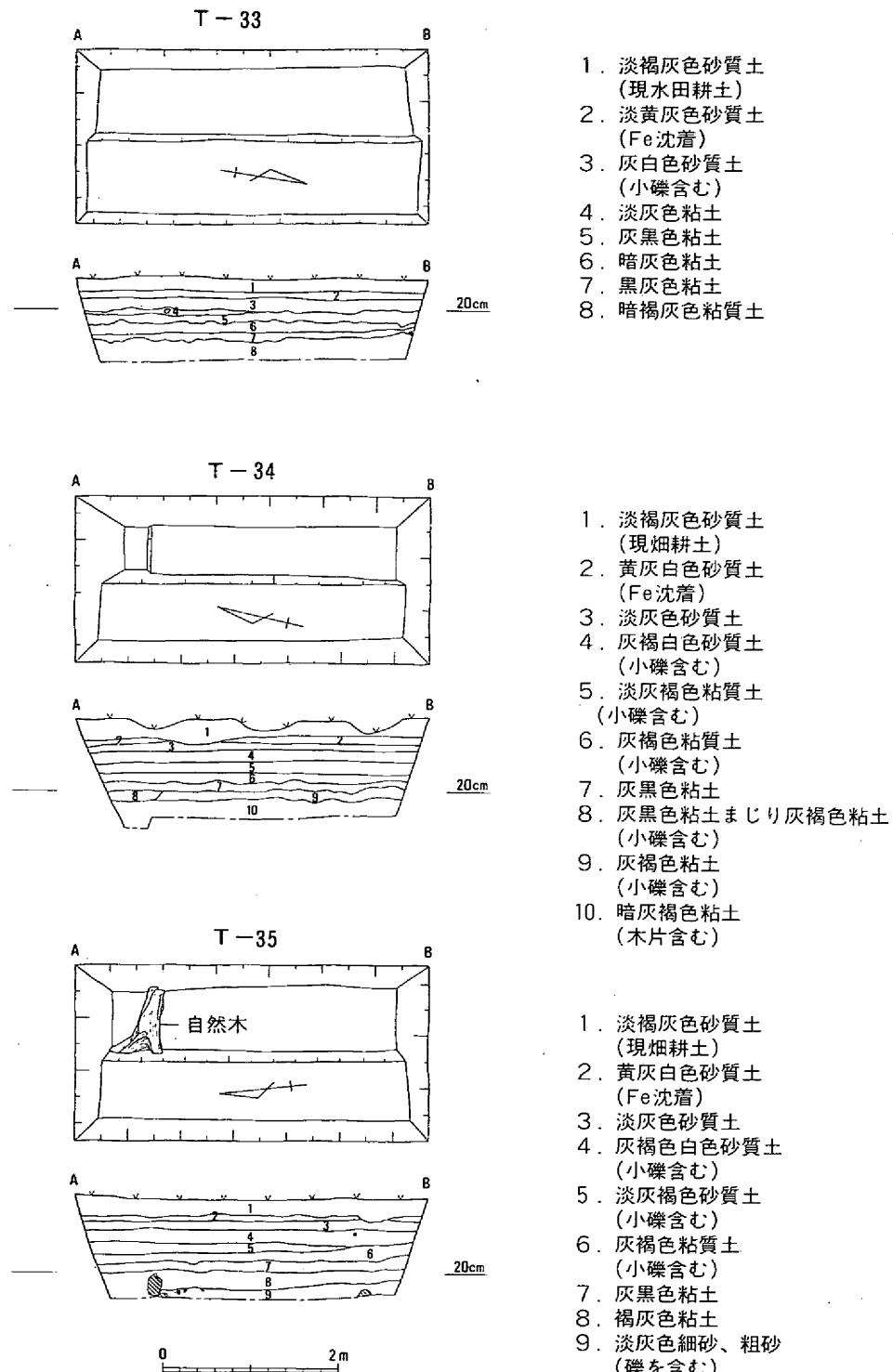
遺跡は、千町平野にむかって南からのびる標高約23mの舌状丘陵の西斜面および平野部に想定されており、弥生土器や石器が、採集されている。発掘調査の対象となったのは平野部分で、現状では水田、畠地になっており、畠地には土器やサヌカイト片の散布が認められる。

〔2〕発掘調査の方法と調査結果の概要

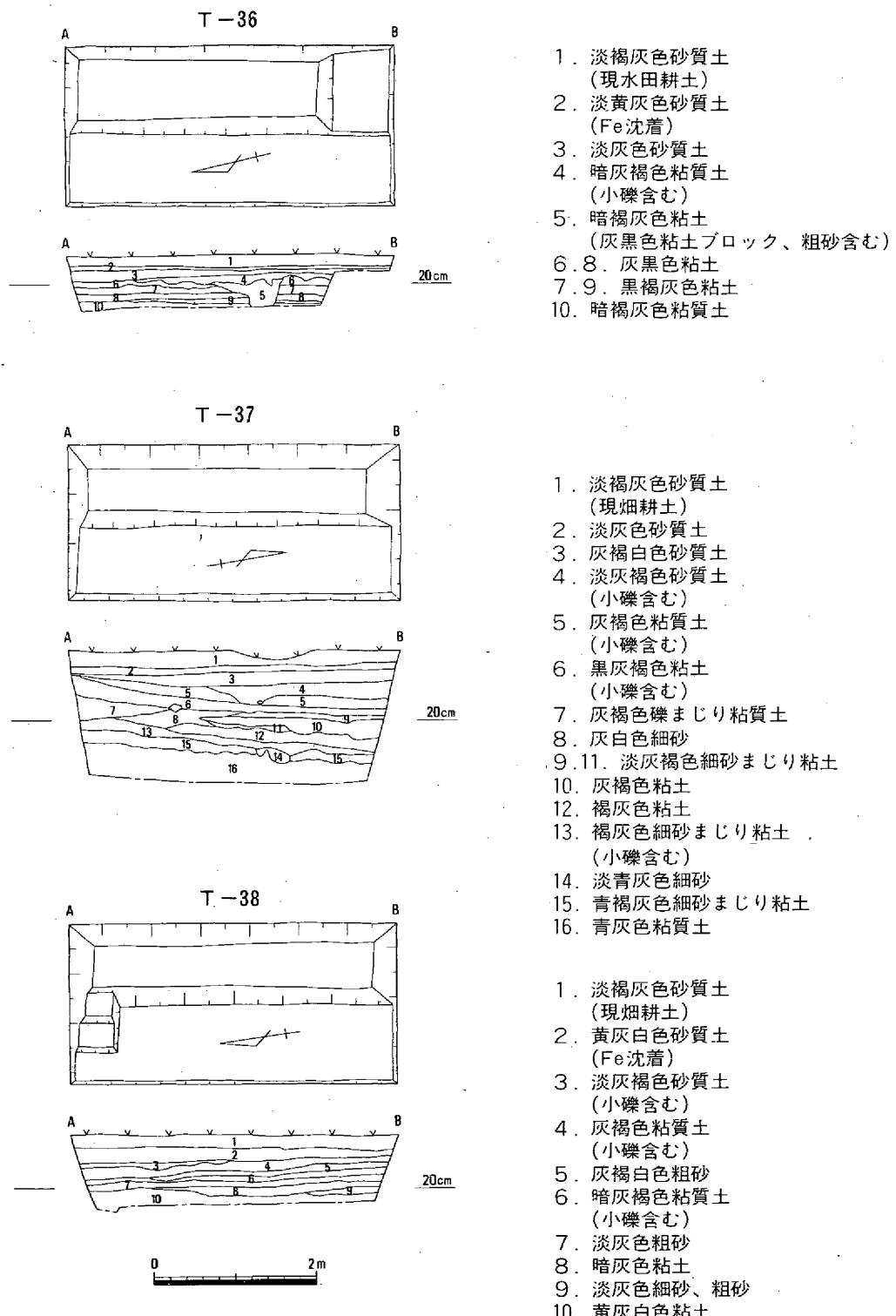
発掘調査は、遺跡の存在が想定される水田、畠地に2×4mのトレンチを5本（T-39・40・41・42・43）設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および図面作成、写真撮影等を行った。

調査の結果、T-39からは遺構は確認できなかったが、土器、石器などがコンテナ4箱と多く出土した。これらはおもに図の3～9層中から出土しており、特に7、8層中からの出土が多くかった。出土遺物には少量の縄文時代晩期の土器（第27図106・107）および弥生時代前期から中世にいたる土器が多く、中国製の青磁や太形蛤刃石斧、打製石庖丁、石鎌などの石器も認められる。特に弥生時代中期前半～中頃の土器が最も多く出土している。各土層の時期については明確ではないが、いずれも中世のものと考えられる。ただし、7、8、9層出土遺物の中では弥生時代前期・中期の土器が最も多く、中世の遺物は少量含まれているにすぎない。また、最下層は粘質土で、このトレンチの位置までは丘陵がのびていないことが伺え、出土遺物はいずれも丘陵部からの流れ込みと考えられる。

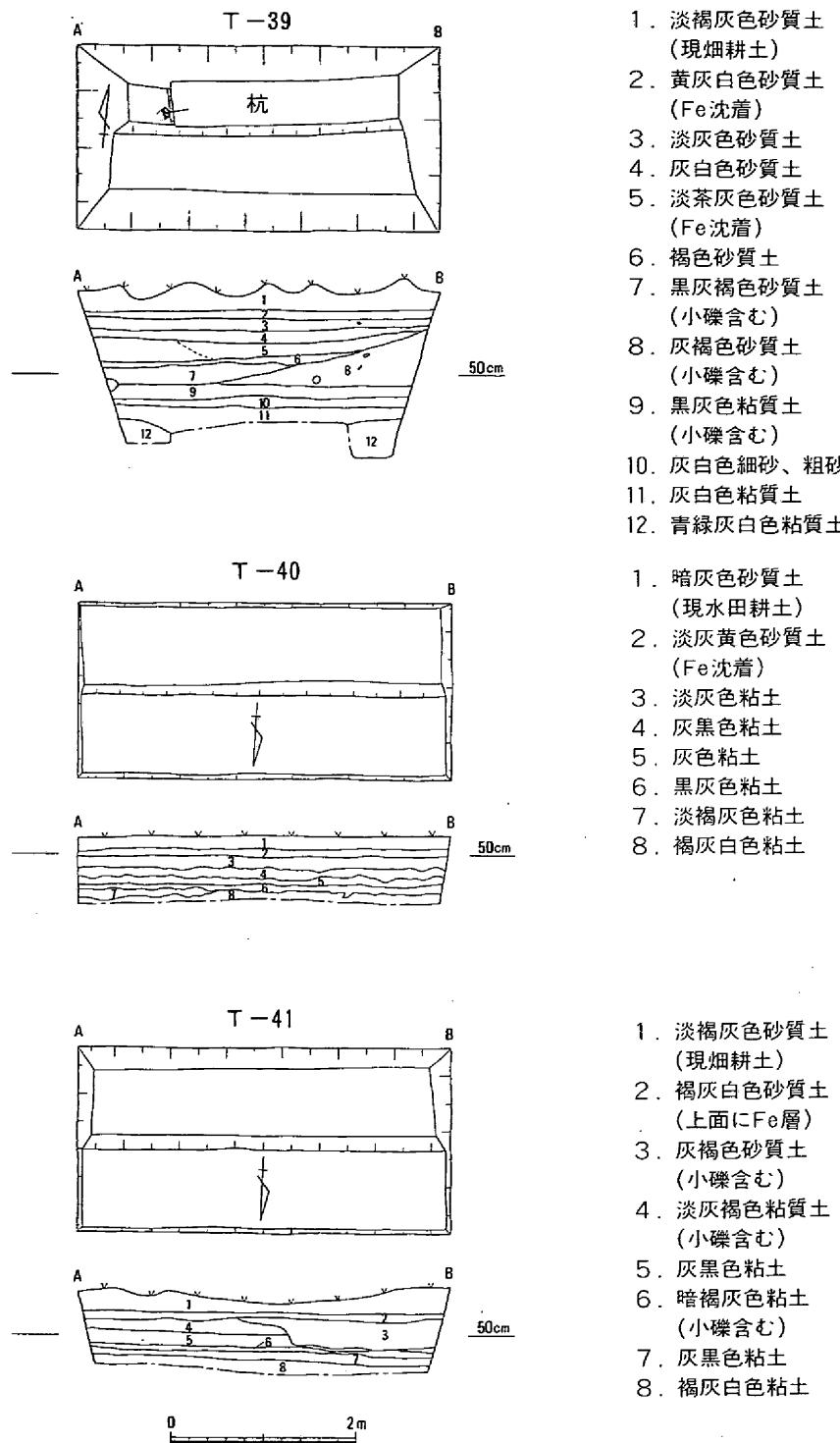
T-40においては遺構は存在せず、T-39でみられたような遺物包含層も認められなかった。



第21図 船原梶ヶ端貝塚 T-33・34・35平・断面図(1/80)



第22図 船原棍ヶ端貝塚 T-36・37・38平・断面図(1/80)

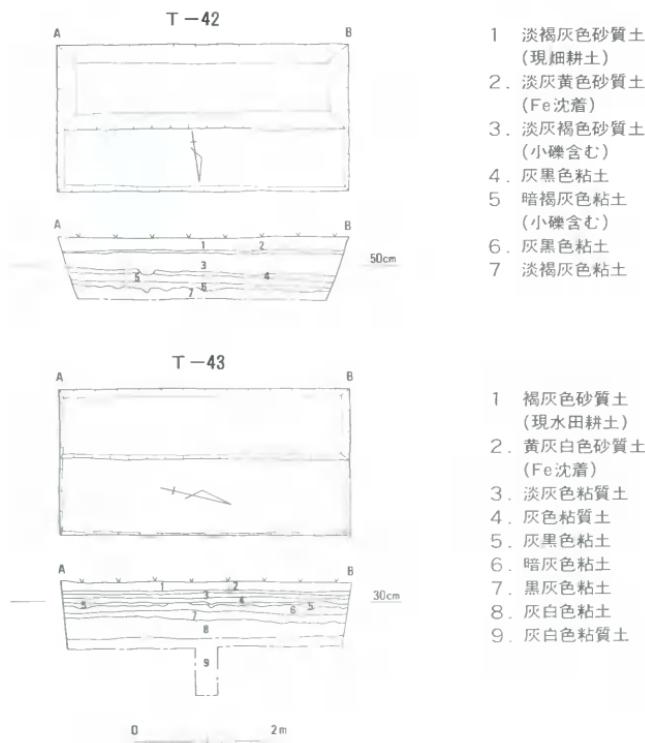


第23図 鳥博遺跡 T-39・40・41平・断面図(1/80)

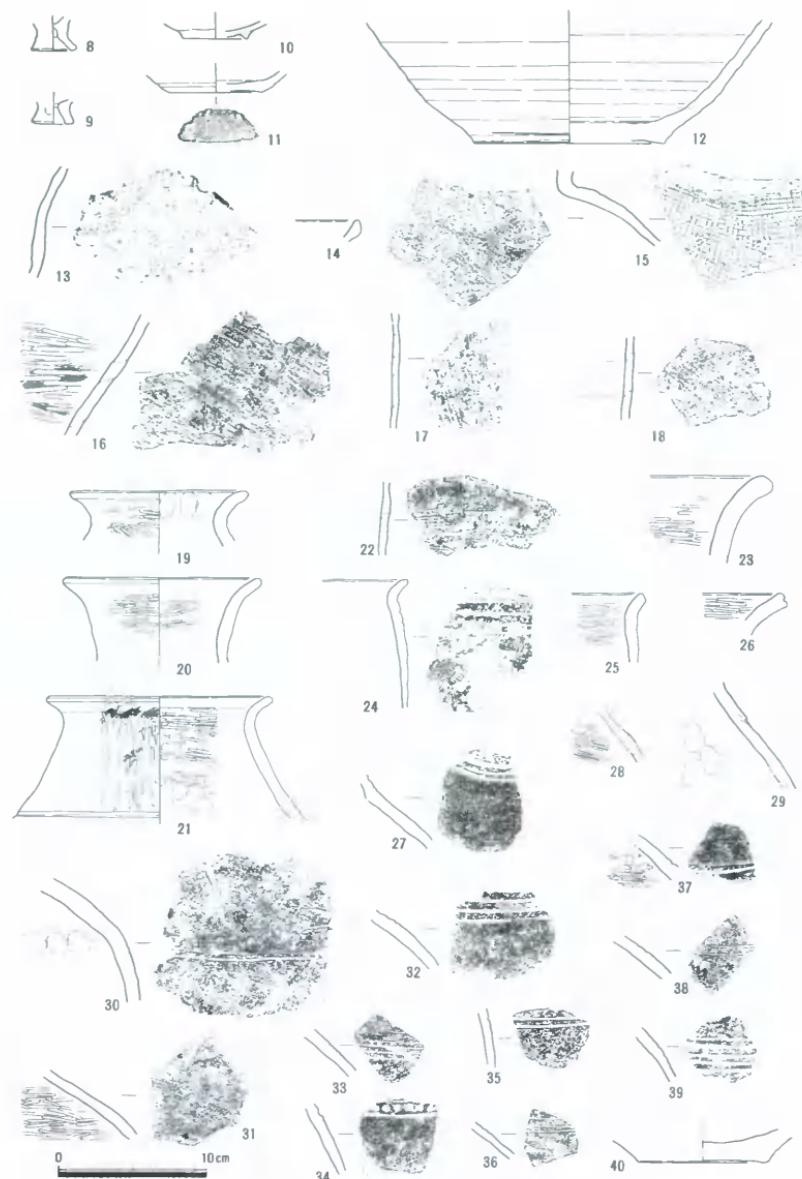
図の3～6層中から弥生時代前期の土器が少量出土したが、他のトレンチの状況からこれらの土層は中世のものと考えたい。

T-41, 42, 43はほぼ同様の層序を示している。現水田層下に中世土器の出土する砂質土層が厚さ20～30cm堆積しており、その下層は灰黒色粘土と暗（褐）灰色の互層となり。最下層には灰白色に近い粘土、粘質土層が認められた。遺構はいずれのトレンチでも検出されず、遺物は各トレンチで弥生時代から中世の土器やサヌカイト片が少量出土した。

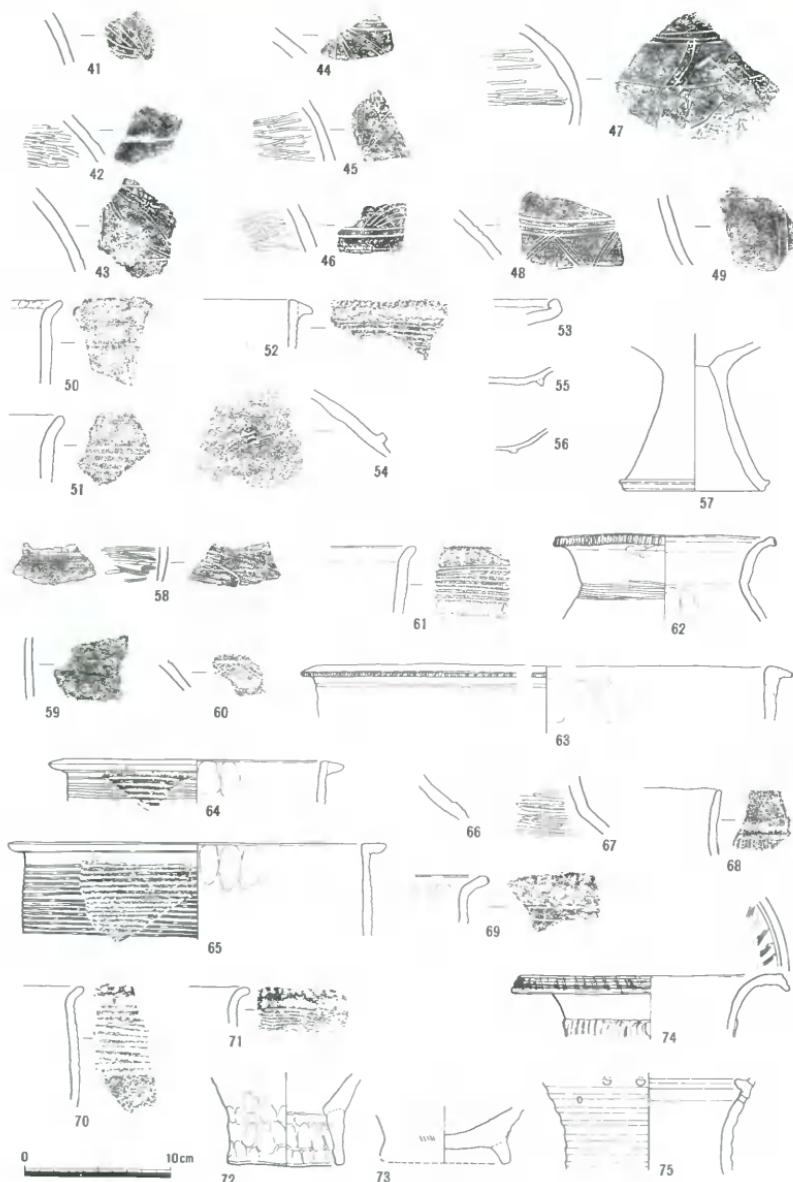
以上のように今回の調査においては、遺構は検出されなかったが、丘陵部からの流れ込みと考えられる遺物を出土する中世包含層が確認できた。特に、T-39では多量の遺物が出土し、周辺の丘陵部に遺構の存在が想定できる。



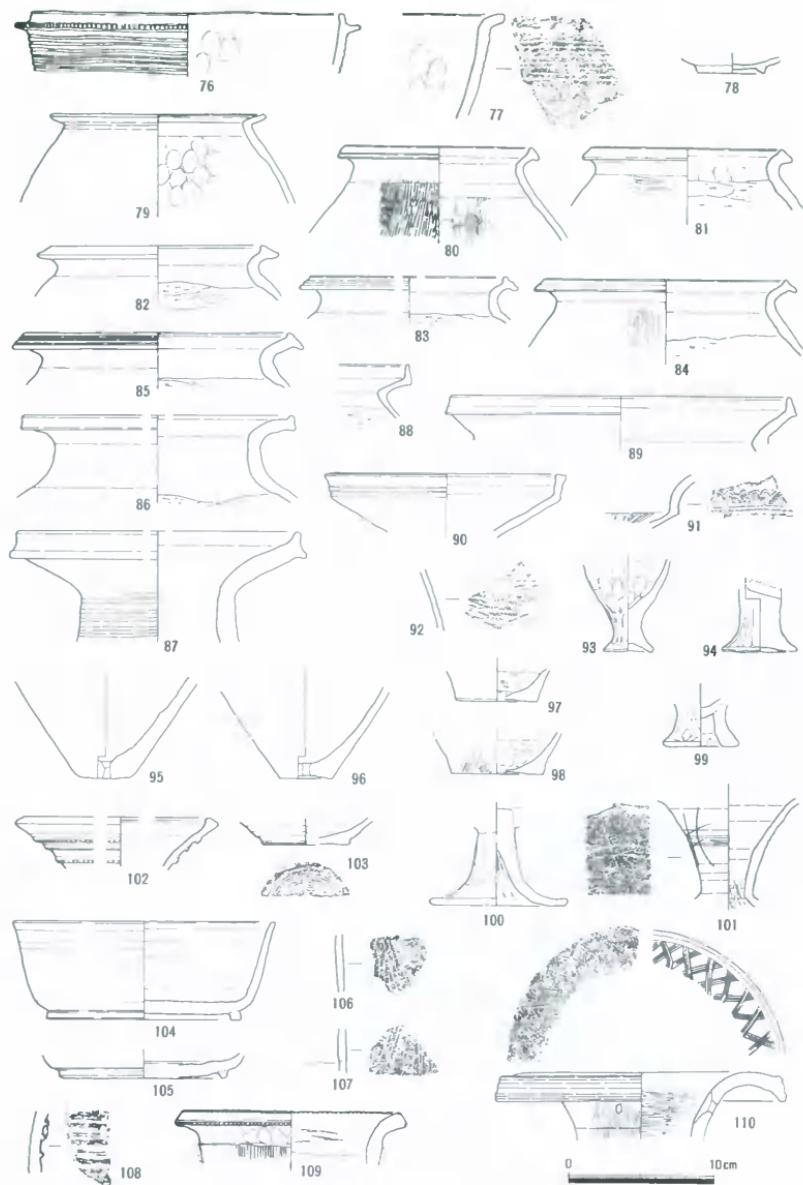
第24図 鳥博遺跡 T-42・43平・断面図(1/80)

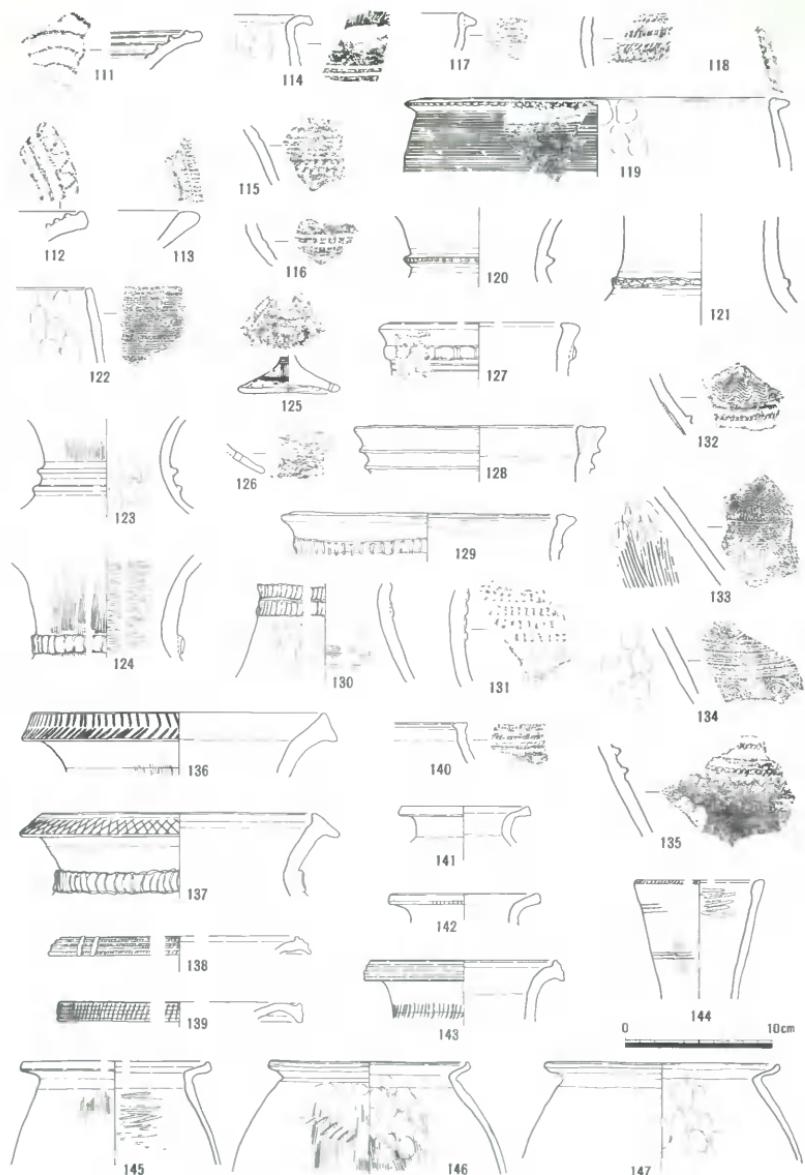


第25図 トレンチ出土遺物(14)

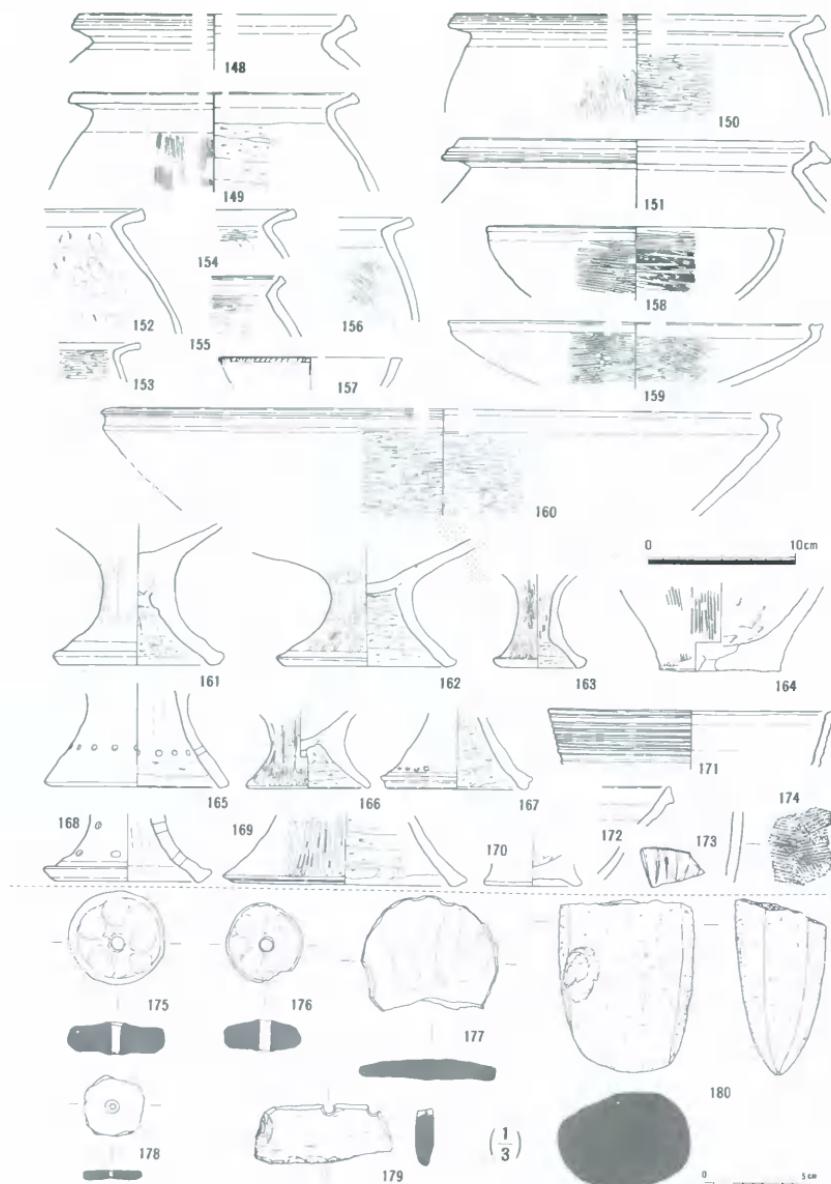


第26図 トレンチ出土遺物(1 4)





第28図 トレンチ出土遺物(1/4)



第29図 トレンチ出土遺物(1/4、1/3)



第30図 トレンチ出土遺物(1/3, 1/2)

表1 トレンチ調査概要一覧表

熊山田散布地

トレンチ番号	遺構	遺物包装層	出土遺物						出土量	現表土レベル cm	遺構遺物記 含層まで 深さ cm
			先土器	縄文	弥生	古墳	奈良-平安	中世	石器	石材	
1	有	有	-	-	-	-	-	-	-	-	少量
2	無	"	-	-	-	-	-	-	-	-	115
3	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	105
4	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	103
5	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	110
6	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	98
7	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	97
8	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	82
9	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	78
10	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	78
											65

真徳貝塚

11	無	無	-	-	-	-	-	-	-	-	僅少
12	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	58
13	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	58
14	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	56
15	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	56
16	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	60
17	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	66
											64

真徳貝塚B

18	有	無	-	-	-	-	-	-	-	-	僅少
19	無	"	-	-	-	-	-	-	-	-	58
20	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	58
21	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	56
22	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	85
											58

真徳貝塚A

23	無	無	-	-	-	-	-	-	-	-	少量
24	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	65
25	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	55
26	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	55

蔵が端貝塚

27	無	無	-	-	-	-	-	-	-	-	僅少
28	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	58
											55

円張東貝塚

29	無	無	-	-	-	-	-	-	-	-	僅少
30	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	58
31	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	55
32	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	140
											155

船原桶ヶ端貝塚

33	無	無	-	-	-	-	-	-	-	-	少量
34	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	104
35	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	103
36	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	62
37	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	103
38	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	86

鳥博遺跡

39	無	有	-	-	-	-	-	-	-	-	多量
40	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	160
41	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	70
42	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	86
43	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	76
											63

表2 遺物観察表

番号	器種	調整の特徴	色調(外面)	時期	出土トレンチ	備考
1	壺	内面ヘラケズリ。頸部外面刻目貼付凸帯。	淡橙黄	弥生中	B地点	
2	甕	内面指頭押え。口縁部ヨコナデ。	燈褐	"	"	
3	高环	环部内面ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ。	"	"	"	
4	"	内面しづり痕。外面ヘラミガキ。	灰白褐	A地点		
5	土錐	指頭押え。指ナデ。	淡灰褐	中世	円張丘陵	穿孔2孔残 両端から穿孔
6	"	"	"	"	"	
7	壺	内面ヨコナデ。外面凸帯箇描波状文。	黒灰	古墳後	船原丘陵	
8	製塙土器	内外面指頭押え。	淡赤灰	弥生後	T-1	
9	"	"	"	"	"	
10	塊	内面若干ヘラミガキ。貼付高台。	黒灰	中世	T-9	瓦器
11	"	内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。	淡灰	"	T-2	
12	鉢	内外面ヨコナデ。底部外面指頭押さえ。	淡灰青	奈良・平安か	T-9	
13	深鉢	"	灰褐	繩文後か	T-18	内外面剥落
14	白磁	"	白色	平安・鎌倉	"	
15	甕	内面同心円印きのちナデ。外面格子目印き。	淡色	中世	T-25	
16	深鉢	内面巻貝条痕のちミガキ。外面巻貝条痕のちナデ。	淡灰褐	細文晩	T-18	沈線文ありか
17	"	内面ナデ。外面擦痕のちヘラミガキか。	黒灰色	繩文晩か	T-30	18, 20と同一個体か
18	"	"	"	"	"	
19	壺	内面指頭押え。外面ヘラミガキ。	灰白褐	弥生前	"	
20	"	内外面ヘラミガキ。	淡灰褐	"	"	
21	"	肩部ヘラ描沈線文。	灰白褐	"	"	
22	深鉢	内面ナデ。外面貝殻条痕のちヘラミガキか。	黒灰	繩文晩か	"	
23	壺	内外面ヘラミガキ。	灰白褐	弥生前	"	
24	甕	外面4条のヘラ描沈線文。	褐灰	弥生前	T-30	外面煤付着
25	"	内面ヘラミガキ。	灰白褐	"	"	
26	壺	内外面ヘラミガキ。口縁端部一条の沈線。	"	"	"	
27	"	外面ヘラミガキ。頸部ヘラ描沈線文。	淡灰褐	"	"	
28	"	内面ヘラミガキ。外面肩部に段。	淡灰	"	"	
29	"	内面指頭押えのちナデ。肩部に段。	淡灰褐	"	"	剥落激しい
30	"	内面指頭押え。外面ヘラミガキ。肩部に二条の沈線文。	淡褐灰	"	"	外面煤付着
31	"	内外面ヘラミガキ。外面ヘラ描沈線文。	灰褐白	"	"	外面黒斑あり
32	"	内面指頭押え。外面3条のヘラ描沈線文。	淡灰褐	"	"	
33	"	内外面ヘラミガキ。4条のヘラ描沈線文。	淡灰褐	"	"	
34	壺か	内面指頭押えのちナデ。外面ヘラ描沈線文、円形刺突文。	灰褐	"	"	内外面煤付着
35	"	内外面ナデ。外面2条のヘラ描沈線文。	"	"	"	外面煤付着
36	壺	内外面ヘラミガキ。三条のヘラ描沈線文。	褐白	"	"	
37	"	外面ヘラミガキ、ヘラ描沈線文。	淡褐	"	"	
38	"	外面2条のヘラ描沈線文。	黒灰褐	"	"	外面炭化物
39	"	外面5条のヘラ描沈線文。	乳褐白	"	"	
40	"	底部外面ヘラミガキ。	褐灰	"	"	
41	"	ヘラ描有軸木葉文。	淡灰褐	"	"	
42	"	内面ヘラミガキ。外面ヘラミガキ、ヘラ描有軸木葉文、段あり。	灰白	"	"	
43	"	内面ナデ。外面ヘラ描無軸木葉文。	淡灰褐	"	"	内面煤付着
44	"	外面ヘラミガキ、ヘラ描有軸木葉文。	灰白	"	"	内面煤付着
45	"	内面ヘラミガキ、外面ヘラ描有軸木葉文。	灰	"	"	
46	"	内面ヘラミガキ。外面ヘラミガキ、ヘラ描有孤文。	暗灰	"	"	外面黒斑
47	壺	外面ヘラ描沈線文。内面ヘラミガキ。	淡灰褐	弥生前	T-30	
48	"	内面指頭押え。外面ヘラミガキ、ヘラ描沈線文。	灰褐白	"	"	内外面煤付着
49	"	外面ヘラ描沈線文。内面指頭押え、ナデ。	"	"	"	
50	甕	口縁部内面指頭押え。外面2条のヘラ描沈線文。	淡橙褐	"	T-31	
51	"	外面4条のヘラ描沈線文。	"	"	"	
52	"	外面ヘラ描沈線文。口縁部刻目。	褐白	"	"	内外面剥落
53	"	口縁部1条の凹線文。	淡褐	弥生か	"	
54	壺碗	内面同心円。叩き残る。外面ヨコナデ、貼付凸帯。	暗灰	平安か	"	須恵器
55	"	内面指頭押え。貼付高台。	乳白	中世	"	土師器
56	"	"	"	"	"	
57	高环	内面しづり痕のちヘラケズリか。	褐橙	弥生中	"	円盤充填剝離
58	深鉢	内外面ヘラミガキのち一部巻貝条痕文。	灰褐	繩文後か	T-32	
59	"	外面ナデか。	黒灰	繩文後~晚	"	内面不明瞭
60	壺	内面指頭押え。外面ヘラ描重孤文。	灰白褐	弥生前	"	
61	甕	内面指頭押え。外面8条のヘラ描沈線文。	淡橙褐	"	"	
62	壺	頸部内面指頭押え。頸部外面に螺旋状ヘラ描沈線文。	淡褐灰	弘生前~中	"	
63	甕	内面指頭押え。外面1条のヘラ描沈線文。口縁端部刻目。	灰白褐	弥生前	"	内面粘土紐痕残る
64	"	内面指頭押え。外面ヘラ描沈線文。	褐灰	"	"	
65	"	"	淡褐	"	"	
66	壺	内面指頭押え。削り出し凸帯上に1条のヘラ沈線文。	褐灰	"	"	
67	"	内面ヘラミガキ。外面に段。	淡灰	"	"	
68	"	内面ナデか。外面刻目貼付凸帯。	淡灰褐	弥生中	"	

第3章 発掘調査の概要

69	甕	内面指頭押え。外面へラ描沈線文。口縁端部刻目。	灰白褐	弥生前	"	
70	甕	外面8条のへラ描沈線文。口縁端部刻目。	淡褐	弥生前	T-32	
71	"	内面指頭押え。外面術描沈線文。口縁端部刻目。	淡褐	弥生中	"	外面黒斑あり
72	"	体部内面ナデ。底部内面指頭押え。外面指頭押え。	白褐灰	弥生前か	"	円盤充填剝落
73	甕	外面わざかにハケメ残る。	灰白褐	弥生前	T-30	剝落
74	壺	口縁部内面描文。頸部刻目貼付凸帯。口縁端部2条の凹線のち術描文。	灰白褐	弥生中	T-32	
75	"	内面貼付凸帯、ナデ。外面凹線文。	淡灰褐	弥生中か	"	
76	甕	内面指頭押え。外面へラ描沈線文。	黑灰色	弥生前	T-34	穿孔3孔残
77	"	内面指頭押え。外面8条のへラ描沈線文。	淡褐	"	"	外面煤付着
78	塊甕	外面ナデ。貼付高台。	灰白	中世	"	土師器
79	"	内面指頭押え。口縁部強いヨコナデ。	淡茶褐	弥生後	T-37	雪母多量に含む。
80	"	体部内面指頭押えのちハケメ。口縁端部に1条沈線。	茶褐灰	弥生後か	"	"
81	"	体部外面へラミガキ。内面へラケズリ。	淡灰	弥生後	"	
82	"	体部外面ハケメ。内面へラケズリ。	淡褐	"	"	
83	"	"	暗灰褐	"	"	外面煤付着
84	"	体部外面へラミガキ。内面へラケズリ。	淡黄褐	"	"	
85	"	口縁部に3条の凹線文。内面へラケズリ。	淡褐	"	"	剥落
86	壺	体部内面へラケズリ。	淡白褐	"	"	
87	"	内面しづりのち指ナデ。外面螺旋状の凹線文。	淡褐	"	"	剥落
88	甕	体部内面へラケズリ。口縁部に梅描沈線文。	淡粉褐	"	"	"
89	"	口縁部に2本凹線文。	灰白橙	"	"	
90	高坏	口縁端部1条の沈線。	橙褐	弥生~後	"	
91	"	外面・描描波状文と2条のへラ描沈線文。	乳白灰	弥生後	"	剥落
92	甕	外面部平行叩き。	暗褐	"	"	
93	台付鉢	杯部内外面指頭押え。脚柱部外面へラケズリ。	褐白灰		T-37	剥落
94	支脚か	底部内面指ナデ。外面指頭押えのちナデ。	淡褐灰			2方向より貫通しない穿孔あり
95	甕	内面へラケズリか。底部焼成後穿孔。	"	弥生	"	剥落
96	"	"	暗灰褐	"	"	
97	"	内面へラケズリ。	淡茶褐	弥生後か	"	雪母多く含む
98	"	体部内面へラケズリ、外面へラミガキ。	茶褐	"	"	雪母多量に含む
99	製塙土器	脚内部へラケズリ、外面指頭押えのちナデ。	淡灰	弥生後	"	
100	高坏	内面しづり痕のちヨコ方向へラケズリか。	淡褐	"	"	
101	"	外面にへラ描き。	淡灰	古墳後	"	
102	壺	外面刻目貼付凸帯。	灰白褐	弥生中	T-38	
103	塊	外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。	淡灰	平安末	"	
104	坏身	内面ヨコナデ。底部外面へラ切り。	"	奈良~平安	"	杯部内面墨痕
105	"	内面ヨコナデ。貼付高台底部へラケズリ。	淡灰青	"	"	
106	深鉢	外面沈線文。	淡灰	繩文晩	T-39	
107	"	"	"	"	"	内面粘土紐痕あり
108	壺	外面貼付凸帯。棒状浮文。	褐橙	弥生前	"	
109	"	口縁端刻目。頸部貼付四帯文。	灰白褐	弥生中	"	
110	"	口縁部内面描文。口縁端部3条の凹線。	"	"	"	焼成後穿孔1孔残
111	"	口縁部内面貼付凸帯文。	淡白褐	弥生前	"	
112	"	内面貼付凸帯文。	褐白	"	"	剥落
113	"	口縁端部刻目、沈線文。	褐	"	"	"
114	甕	口縁端部刻目。胴部体面へラ描沈線文。	灰白	"	"	
115	"	多面へラ描沈線文、三角形の刺突文。	暗褐灰	"	"	
116	壺	外面へラ描沈線文。	淡灰褐	弥生前	"	
117	甕	外面術描沈線文。口縁端部刻目。	褐灰	弥生中	"	
118	"	外面凹線、刻目文、円形刺突文。	淡褐	"	"	
119	"	口縁端部刻目、体部外面術描沈線文。	暗褐灰	"	"	
120	壺	頸部外面貼り付け凸帯。	淡褐	弥生前	"	
121	"	"	褐灰白	"	"	
122	"	外面術描沈線文。	淡渴橙	弥生中	"	
123	"	内面指頭押えのちナデ、外面ハケメ。	淡褐	"	"	穿孔1孔残
124	"	頸部外面貼付凸帯。	灰褐	"	"	穿孔2孔残
125	壺	外面術描沈線文。内面指頭押え。	淡稽褐	"	"	剥落
126	"	内面指頭押え。外面へラ描沈線、竹管文。	褐白	"	"	
127	壺	外面へラ描沈線文2条刻目貼付凸帯。	灰白	"	"	
128	"	外面貼付凸帯。	褐灰白	"	"	剥落
129	"	外面刻目貼付凸帯。	淡灰褐	"	"	
130	"	頸部内面しづり痕。頸部外面指頭圧痕文貼付凸帯。	淡灰褐	"	"	
131	"	内面指頭押えのちナデ。外面指頭圧痕文貼付凸帯。	淡褐	"	"	
132	"	外面術描波状文。刻目貼付凸帯。	乳灰白	"	"	
133	"	内面指頭押えのちハケメ。外面ハケメのち術描沈線文。	褐灰白	"	"	内面剥落
134	"	内面指頭押え。外面術描沈線文。	橙褐白	"	"	
135	"	内面ナデ。外面刻目貼付凸帯。術描沈線文。	淡灰褐	"	"	
136	"	口縁端部ハケ状工具による刻目。	褐白	"	"	
137	"	口縁端部格子目状へラ描沈線文。頸部刻目貼付凸帯。	橙褐白	"	"	
138	"	外面口縁端部3条の凹線のうち棒状浮文。	乳灰白	"	"	
139	壺	外面口縁端部2条の凹線のち刻目。	淡褐灰	弥生中	"	

140	"	外面へラ描沈線文、刻目。	橙褐	"	"	内外面丹塗り
141	"	内外面ヨコナデか。	灰	"	"	
142	"	口縁端部に刻目。	灰白褐	"	"	
143	"	頸部外面刻目文。口縁端部3条の凹線。	白橙	"	"	
144	"	内面一部へラミガキ。外面ハケメのちヘラ描沈線3条2組。	淡灰褐	"	"	剥落
145	"	体部内面へラミガキ。外面ハケメ。口縁部ヨコナデ。	淡橙褐	"	"	
146	"	体部内面指頭押えのちハケメ。外面ハケメ、刺突文。	暗褐灰	"	"	
147	"	内面指頭押え。外面ナデか。	明褐橙	"	"	剥落
148	"	口縁端部2条の凹線。	灰白褐	"	"	"
149	"	体部外面ハケメ。内面へラケズリ。	乳白褐	"	"	
150	"	体部内外面へラミガキ。	乳褐白	"	"	
151	"	外面口縁端部浅い2条の凹線。	淡白褐	"	"	口縁部円塗り
152	"	体部内面指頭押え。	暗灰褐	"	"	
153	"	体部内面へラミガキ。外面ハケメ。	淡褐灰	"	"	
154	"	体部内面へラミガキ。	淡褐	"	"	
155	"	"	褐白	"	"	剥落
156	高坏	体部内面ハケメ。	灰褐白	"	"	剥落
157	"	口縁端部に刻目。	褐橙白	"	"	
158	"	坏部内面ハケメのちヘラミガキ。外面へラミガキ。	淡灰褐	"	"	
159	"	坏部内面外面へラミガキ。	"	"	"	
160	"	"	乳白灰	"	"	黒斑あり
161	"	坏部内面へラミガキ。脚部内面へラケズリ。	趙褐白	弥生中	"	円盤充填
162	高坏	脚部内面へラケズリ。外面へラミガキ。	淡褐橙	"	"	
163	高坏か	脚部内面しばり、へラケズリ。外面へラミガキ。	灰白	弥生前	"	底部穿孔
164	甕	外面ハケメ。	乳褐白	弥生中	"	
165	台坏鉢か	脚部内面へラケズリか。	淡灰褐	"	"	穿孔6孔残存
166	高坏	脚部内面へラケズリ。	乳灰白	"	"	
167	"	内面へラケズリ。外面に竹管文。	趙褐白	"	"	穿孔3孔残存
168	"	内面にしばり痕	暗綠	"	"	
169	"	内面へラケズリ。外面へラミガキ。脚端部1条の沈線。	灰黑	"	"	
170	甕	内面指頭押え。	灰橙褐白	弥生前か	"	
171	"	外面に7条の凹線。	灰褐白	弥生中か	"	剥落
172	鉢	内外面ヨコナデ。	淡青灰	中世	"	東播産
173	碗	内外面施釉。外面錫蓮弁文。	暗綠	"	"	
174	甕	内面ナデ。外面棱状平行叩き。	灰黑	"	"	東播産
175	土製軽鋏車	最大径49mm。最大厚16mm。穿孔径6mm。36.42g		T-30		
176	"	最大径40mm。最大厚15mm。穿孔径7.5mm。23.23g		"		
177	"	残存径68mm。最大厚10.5mm。49.47g		T-32		
178	"	最大径31mm。最大厚5mm。穿孔径6.8mm。5.7g		"		
179	磨石磨丁	最大長71mm。最大幅29mm。最大厚9mm。28.70g		T-37		安山岩
180	太形蛤	残存長87mm。最大幅69mm。最大厚47mm。445.07g。		T-39		細粒閃綠岩
181	刃石斧	残存長81mm。最大幅39mm。最大厚18mm。93.58g		T-32		ホルンフェルス
182	砥石	残存長52mm。残存幅55mm。最大厚5mm。30.068g		"		安山岩
183	磨石磨丁	最大長40mm。最大幅28mm。最大厚23mm。33.51g		T-34		"
184	ナイフ	最大長54mm。最大幅17.5mm。最大厚68mm。5.68g	先土器	T-35		サヌカイト
185	型石器	残存長46mm。最大幅17mm。最大厚5.2mm。9.20g		T-32		
186	砥石	最大長66.5mm。最大幅34.5mm。最大厚16.73.73g		T-30		サヌカイト
187	打製砲丁	残存長37.5mm。最大幅21.0mm。最大厚6mm。5.35g		T-39		
188	扁平石斧	残存長40.5mm。最大幅21.5mm。最大厚11mm。21.14g		T-30		流紋岩質凝灰岩
189	性状片刃石斧	残存長34mm。最大幅14mm。最大厚12.5mm。9.06g		T-38		凝灰岩
190	楔形石器	最大長40mm。最大幅11.5mm。最大厚6mm。3.72g		T-36		截断面あり、サヌカイト
191	"	最大長27mm。最大幅25.5mm。最大厚6mm。5.78g		T-31		"
192	スクレイパー	最大長47mm。最大幅45.5mm。最大厚12mm。26.40g		T-35		サヌカイト
193	楔形石器	最大長31mm。最大幅33.5mm。最大厚11mm。11.91g		T-31		截断面あり、サヌカイト
194	"	最大長27mm。最大幅22mm。最大厚8mm。3.92g		T-35		"
195	"	最大長35mm。最大幅24.5mm。最大厚5.5mm。6.07g		T-37		刃部磨耗
196	"	最大長20.5mm。最大幅12mm。最大厚8mm。2.18g		T-30		截断面あり、サヌカイト
197	"	最大長24.5mm。最大幅31.5mm。最大厚5.5mm。4.77g		T-42		"
198	"	最大長29.5mm。最大幅19.5mm。最大厚16.5mm。11.91g		T-1		"
199	スクレイパー	残存長41.5mm。残存長54mm。最大厚5mm。15.01g		T-32		サヌカイト
200	楔形石器	最大長32.5mm。最大幅26mm。最大厚6.5mm。6.83g		T-37		截断面あり、サヌカイト
201	スクレイパー	最大長42.5mm。最大幅39.5mm。最大厚11.5mm。21.26g		T-39		"
202	楔形石器	最大長23.5mm。最大幅23.5mm。最大厚6mm。4.26g		"		サヌカイト
203	石鉄	最大長20mm。最大幅18mm。最大厚3mm。0.88g		T-35		サヌカイト
204	"	最大長17mm。最大幅18mm。最大厚3mm。0.67g		T-39		"
205	"	最大長15mm。最大幅15.5mm。最大厚4mm。0.76g		T-1		"

第4章 まとめ

今回確認調査を実施した遺跡は、邑久郡邑久町尾張に所在する熊山田散布地以下8遺跡である。調査の目的は、当該遺跡周辺において土地改良総合整備事業が計画されているのに伴い、工事施行前に遺跡の規模・状況等を確認し、保護・保存のための基礎資料を作成することであった。

これらの遺跡は、従来土器や石器、貝などが採集されていたが、いずれも遺跡の実態は明確ではなかった。今回の調査は、対象となったのが土地改良総合整備事業の実施が予定されている地域に限られていたが、以下に述べるような成果を得ることができた。

熊山田散布地については、想定されている遺跡の範囲の南東部から南についてその様相を知ることができた。第1に、T-1, 2で土壌・溝が確認されたことからT-1と2の周辺に弥生時代から中世にいたる集落跡が存在していることが明確となった。しかも、これらの集落跡は現表土面からマイナス15~30cmと非常に浅いレベルで検出されることが明らかになった。第2に、T-1, 2で確認された弥生時代から中世の集落跡（微高地）はT-3から南のトレーナー（T-3~10）では確認されず、T-2と3の間で集落跡は途切れるものと考えられる。ただし、淡灰色粘土を中心とした中世の包含層はT-3~10まで存在している。しかし、この包含層中からの遺物の出土量はごく少量で周辺に中世の遺構の存在は考えられない。

真徳貝塚においては貝塚などの遺構は認められなかった。また、遺物も貝は一点も出土せず、弥生土器や中世土器が少量出土したのみである。第3章第2節で記したように、当該地は中世段階においても湿地の状況を呈しており遺跡（生活面）は存在しないと考えられる。

真徳貝塚Aにおいても貝塚などの遺構は確認されず、遺物も弥生土器や中世土器が少量出土したのみである。真徳貝塚と同様に当該地は中世においても湿地の状況を呈しており、遺跡は存在しないと考えられる。なお貝塚については、地元の人の教示から今回調査区の北東の丘陵裾部に存在する可能性が考えられる。

真徳貝塚Bにおいては、T-18で確認された貝層が注目される。貝層は現表土面からマイナス180~240cm、海拔でマイナス110~180cmにおいて認められた。この貝層はカキが殆どで、土器は出土しなかったものの第3章第4節で記したように、わずかではあるが獸骨や魚骨、炭化物などが出土しており人為的なものと考えたい。時期については、貝層より上層から出土した縄文時代後期の土器の存在から、縄文時代後期以前の縄文時代と考えられる。この貝層の範囲については、T-18の北西約30mの排水路改修工事の際に多くの貝が出土したこと、T-19では貝層が確認できなかったこと、また、T-18の北約10mには岩盤が露出していることから第31図のような範囲を想定したい。T-19~22の状況は真徳貝塚および真徳貝塚Aにお

ける状況とほぼ同様で、遺跡は存在しないと考えられる。

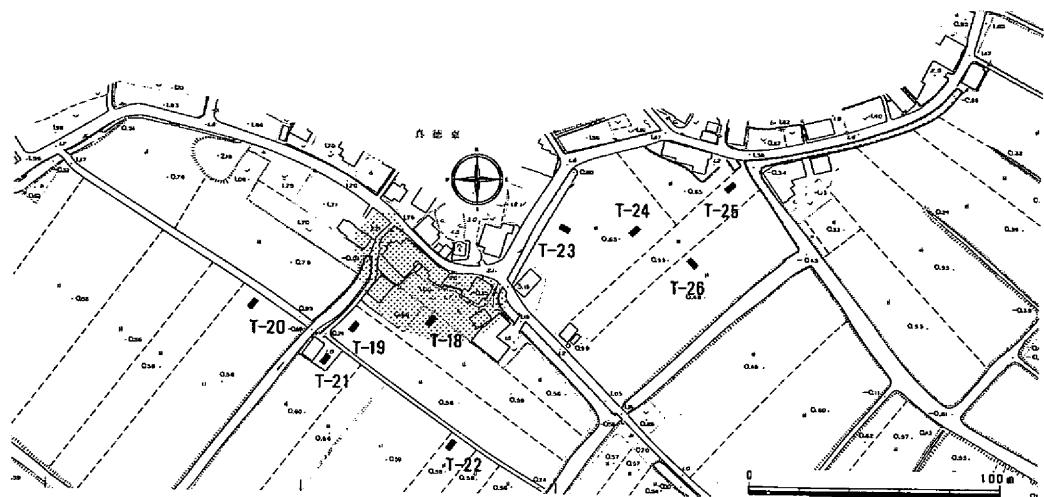
蔵が端貝塚については、調査の対象となった水田部には貝塚等の遺跡は存在しないと考えられる。遺物も弥生土器などが少量出土しているが、いずれも周辺部からの流れ込みと考えられる。なお貝塚については地形から考えて今回の調査部分の南の丘陵裾部に存在する可能性は考えられる。

円張東貝塚については今回のトレンチでは貝塚など遺構は認められなかったが、T-30, 31, 32において多くの遺物を出土する包含層が確認できた。出土遺物のなかで最も多いのは弥生時代前期の土器で、他に土製紡錘車や扁平石斧、磨製石庖丁の出土が注目され、周辺に当該期の遺跡が存在するものと考えられる。遺跡の想定地としては調査区の東に位置する低丘陵上が考えられる。なお、今回の調査区周辺における遺跡の範囲については、第1章で記した貝層や採集品などとも考えあわせ、ほぼ第32図に示した範囲を想定したい。

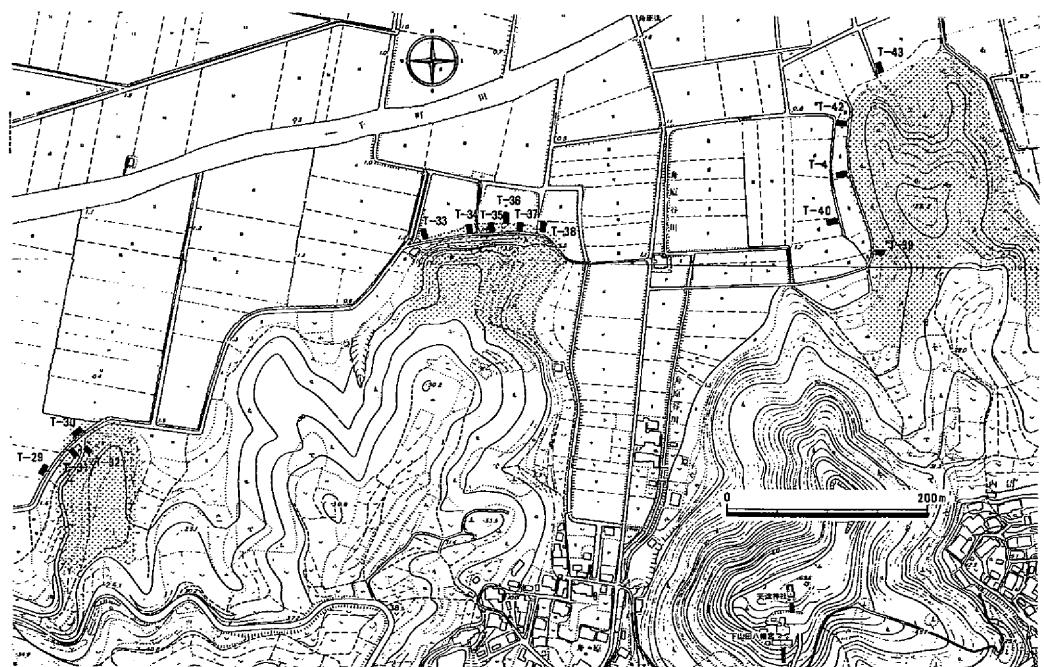
船原梶ヶ端貝塚においては貝塚などの遺構は認められなかったが、丘陵に近い畠地に設定したT-34, 35, 37において土器、石器などの多くの遺物を含む包含層が確認された。時期は中世と考えられるが、出土遺物としては弥生土器が最も多く、磨製石庖丁や柱状片刃石斧も出土している。また、玉髓（T-34）やサヌカイト製のナイフ形石器（T-35）も出土しており注目される。これらの遺物はいずれも南に位置する低丘陵上から流れ込んだものと考えられ、遺跡の本体はこの丘陵上に存在するものと考えられる。今回の調査区周辺における遺跡の範囲としては第32図に示した範囲を想定したい。

鳥博遺跡については、遺構は確認されなかったが、T-39において土器、石器が多量に出土する遺物包含層が認められた。遺物は弥生時代中期の土器が最も多く、太形蛤刃石斧や打製石庖丁も出土している。これらの遺物はいずれも東に位置する丘陵斜面から流れ込んだものと考えられ、遺跡の本体はこの丘陵上および丘陵斜面に存在するものと考えられる。今回の調査区周辺における遺跡の範囲としては第32図に示した範囲を想定したい。

以上のように今回の確認調査の結果、真徳貝塚Bにおいて貝塚を、熊山田散布地において集落跡を、円張東貝塚・船原梶ヶ端貝塚・鳥博遺跡において遺物包含層を確認することができ、また、それらの範囲を想定することができた。これらの成果をもとに、今後土地改良整備事業実施にあたっては、これらの遺跡の取り扱いについて関係者間の連絡と充分な協議が必要となるであろう。



第31図 真徳貝塚B 貝塚範囲想定図(1/3000)



第32図 円張東貝塚、船原棍ヶ端貝塚、鳥博遺跡、遺跡範囲想定図(1/7500)



1. 熊山田散布地 T-1、2周辺近景(南から)



2. 真徳貝塚遠景(南から)

図版2



1. 真徳貝塚A、B遠景(西から)



2. 蔵が端貝塚遠景(北東から)



1. 円張東貝塚遠景(北西から)



2. 船原梶ヶ端貝塚遠景(北から)

図版 4



1. 鳥博遺跡遠景(北西から)



2. 真徳貝塚B T-18周辺近景(南西から)



1. 円張東貝塚 貝層露出部分近景(南西から)

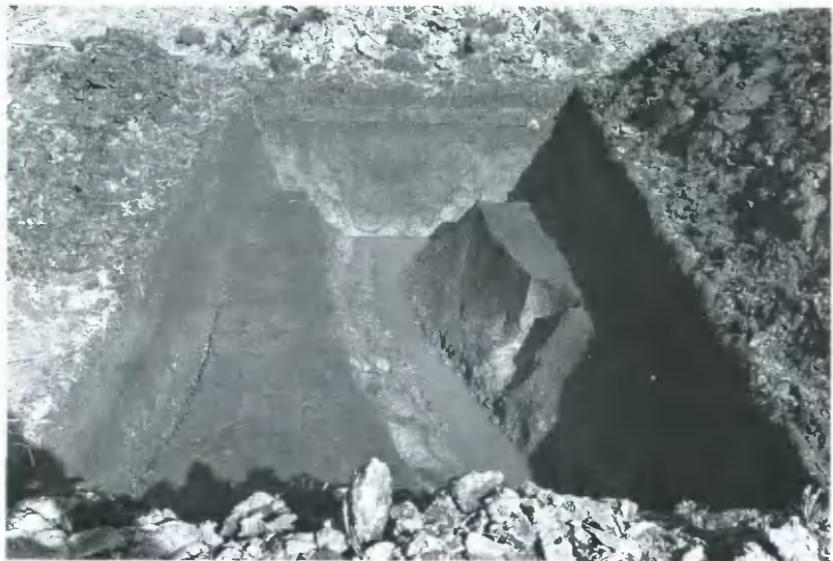


2. 円張東貝塚 貝層露出部分(北西から)

図版 6



1. 熊山田散布地 T-1 土（北西から）



2. 熊山田散布地 T-1 溝(南から)



1. 真徳貝塚B T-18 発掘風景(南東から)



2. 真徳貝塚B T-18 貝層(南西から)

図版 8



1. 円張東貝塚 T-30 (西から)



2. 円張東貝塚 T-31 (北から)



1. 鳥博遺跡 T-39 (南東から)



2. 鳥博遺跡 T-39 発掘風景(北西から)

図版10



1. 熊山田散布地 T-1 北壁(南から)



2. 熊山田散布地 T-1 南壁(北から)



3. 熊山田散布地 T-1 東壁(西から)



4. 熊山田散布地 T-2 (南西から)



5. 熊山田散布地 T-2 東壁(西から)



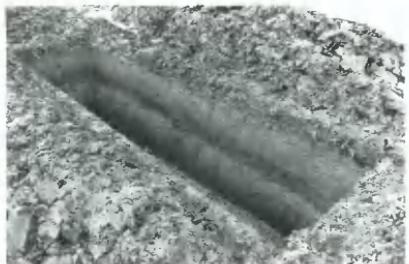
6. 熊山田散布地 T-3 (北東から)



7. 熊山田散布地 T-4 (南東から)



8. 熊山田散布地 T-5 (北東から)



1. 熊山田散布地 T-6 (北東から)



2. 熊山田散布地 T-7 (北東から)



3. 熊山田散布地 T-8 (南東から)



4. 熊山田散布地 T-9 (南東から)



5. 熊山田散布地 T-10(北東から)



6. 真徳貝塚 T-11 (南東から)



7. 真徳貝塚 T-12 (南東から)



8. 真徳貝塚 T-13 (南東から)

図版12



1. 真徳貝塚 T-14 (南東から)



2. 真徳貝塚 T-15 (東から)



3. 真徳貝塚 T-16 (北西から)



4. 真徳貝塚 T-17 (北西から)



5. 真徳貝塚B T-18 (南から)



6. 真徳貝塚B T-19 (北から)



7. 真徳貝塚B T-20 (東から)



8. 真徳貝塚B T-21 (西から)



1. 真徳貝塚B T-22 (東から)



2. 真徳貝塚A T-23 (北から)



3. 真徳貝塚A T-24 (北から)



4. 真徳貝塚A T-25 (東から)



5. 真徳貝塚A T-26 (北東から)



6. 蔵が端貝塚 T-27 (北西から)



7. 蔵が端貝塚 T-28 (北から)



8. 円張東貝塚 T-29 (北から)

図版14



1. 円張東貝塚 T-32 (西から)



2. 船原梶ヶ端貝塚 T-33 (東から)



3. 船原梶ヶ端貝塚 T-34 (南西から)



4. 船原梶ヶ端貝塚 T-35 (西から)



5. 船原梶ヶ端貝塚 T-38 (西から)



6. 船原梶ヶ端貝塚 T-37 (北東から)



7. 船原梶ヶ端貝塚 T-38 (西から)



8. 鳥博遺跡 T-40 (北西から)



1. 鳥博遺跡 T-41 (北東から)



2. 鳥博遺跡 T-42 (北西から)



3. 鳥博遺跡 T-43 (北西から)



4. 鳥博遺跡 T-39 埋めもどし風景



5. 真徳貝塚B T-18 貝層出土の貝

図版16



43



42



44



41

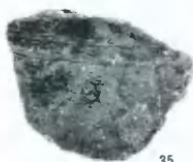
1. 円張東貝塚 T-30 出土土器



48



46

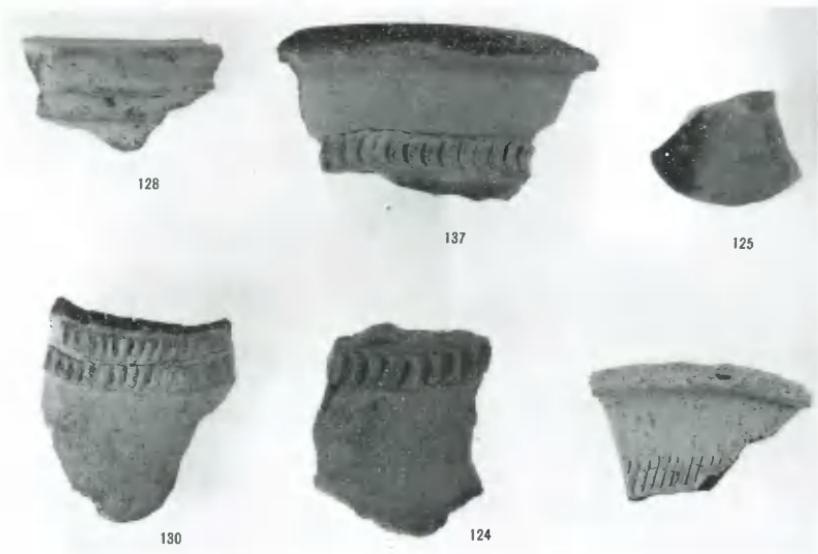


35



34

2. 円張東貝塚 T-30 出土土器

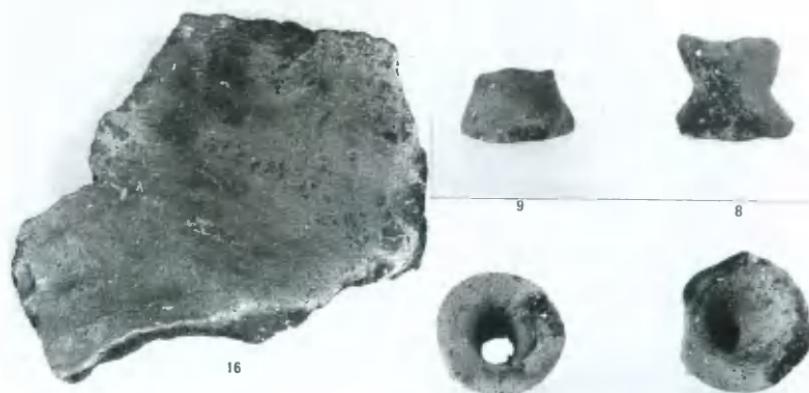


1. 烏博遺跡 T-39 出土土器

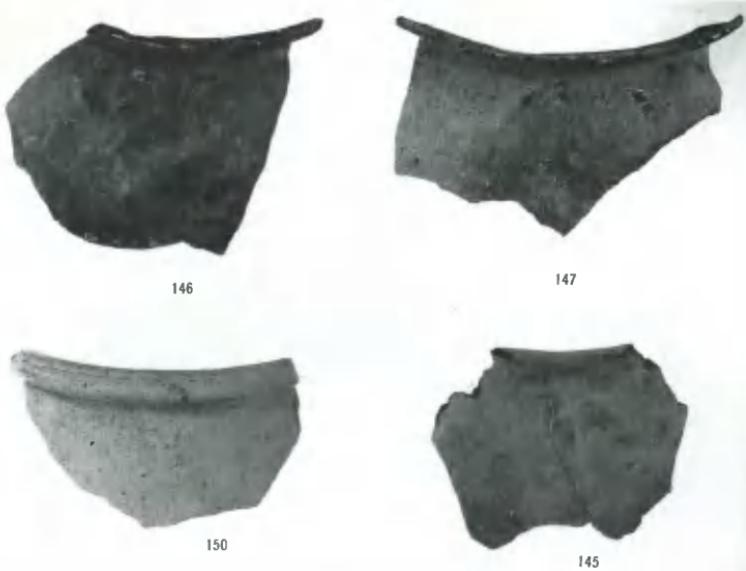


2. 烏博遺跡 T-39 出土土器

図版18



トレンチ出土遺物

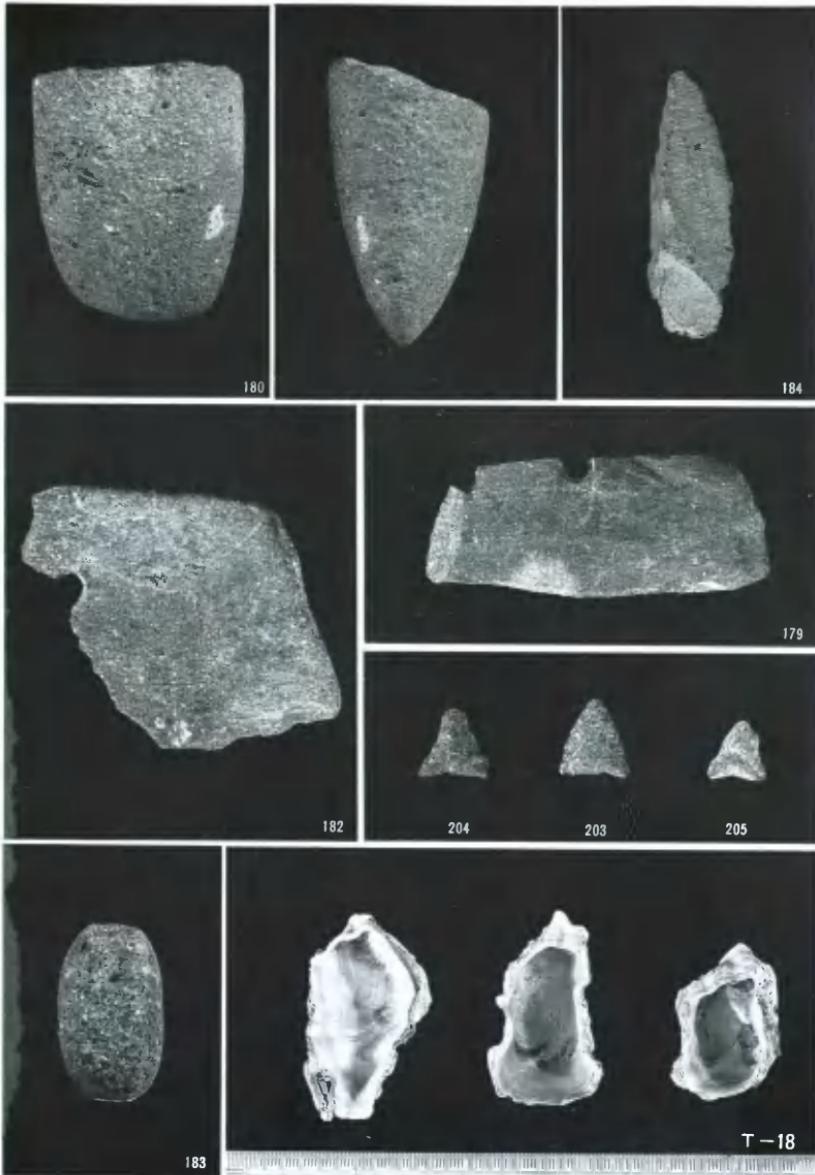


1. 鳥博遺跡 T-39 出土土器



2. 真徳貝塚B T-18 貝層出土の貝

図版20



トレンチ出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 68

熊山田散布地ほか

昭和63年3月15日 印刷

昭和63年3月30日 発行

編集 岡山県古代吉備
文化財センター

発行 岡山県教育委員会

印刷 友野印刷株式会社